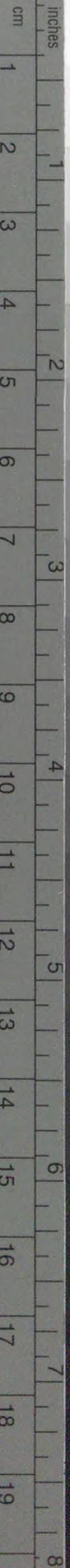


Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



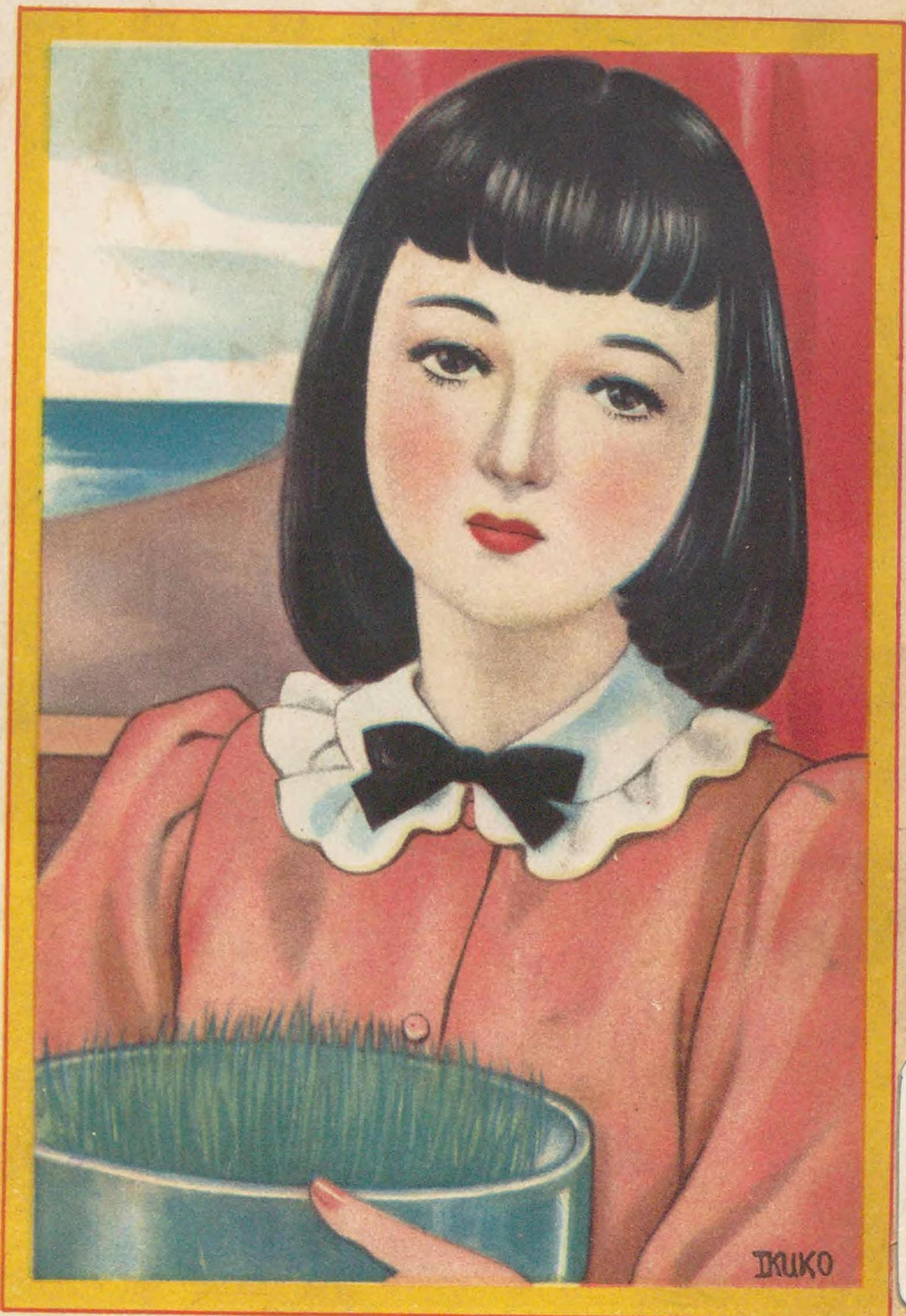
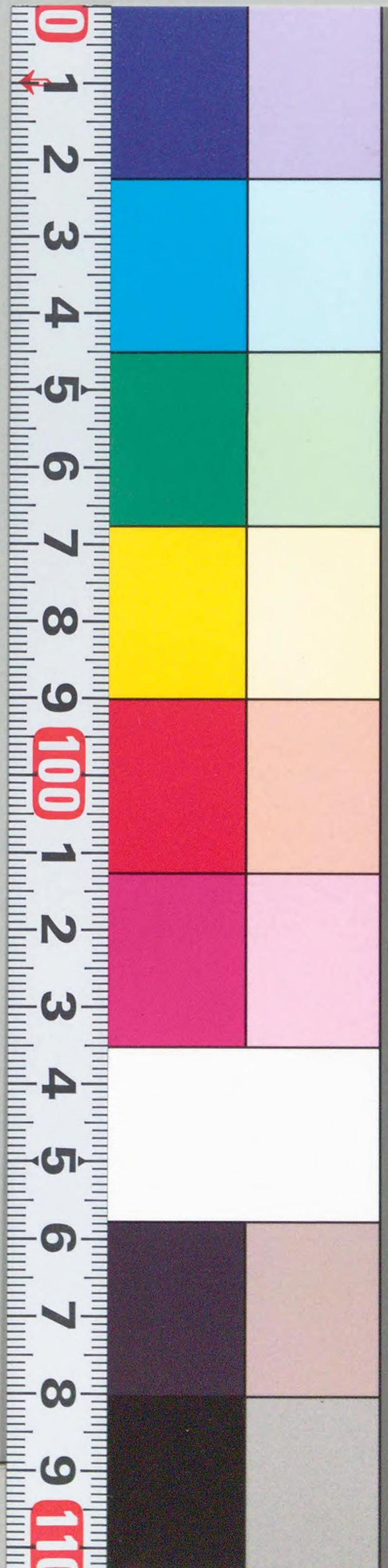
© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

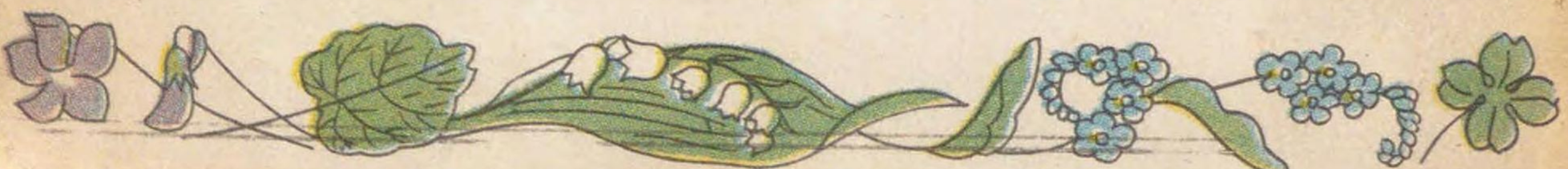


絹きぬ

糸いと

草そう

福田正夫

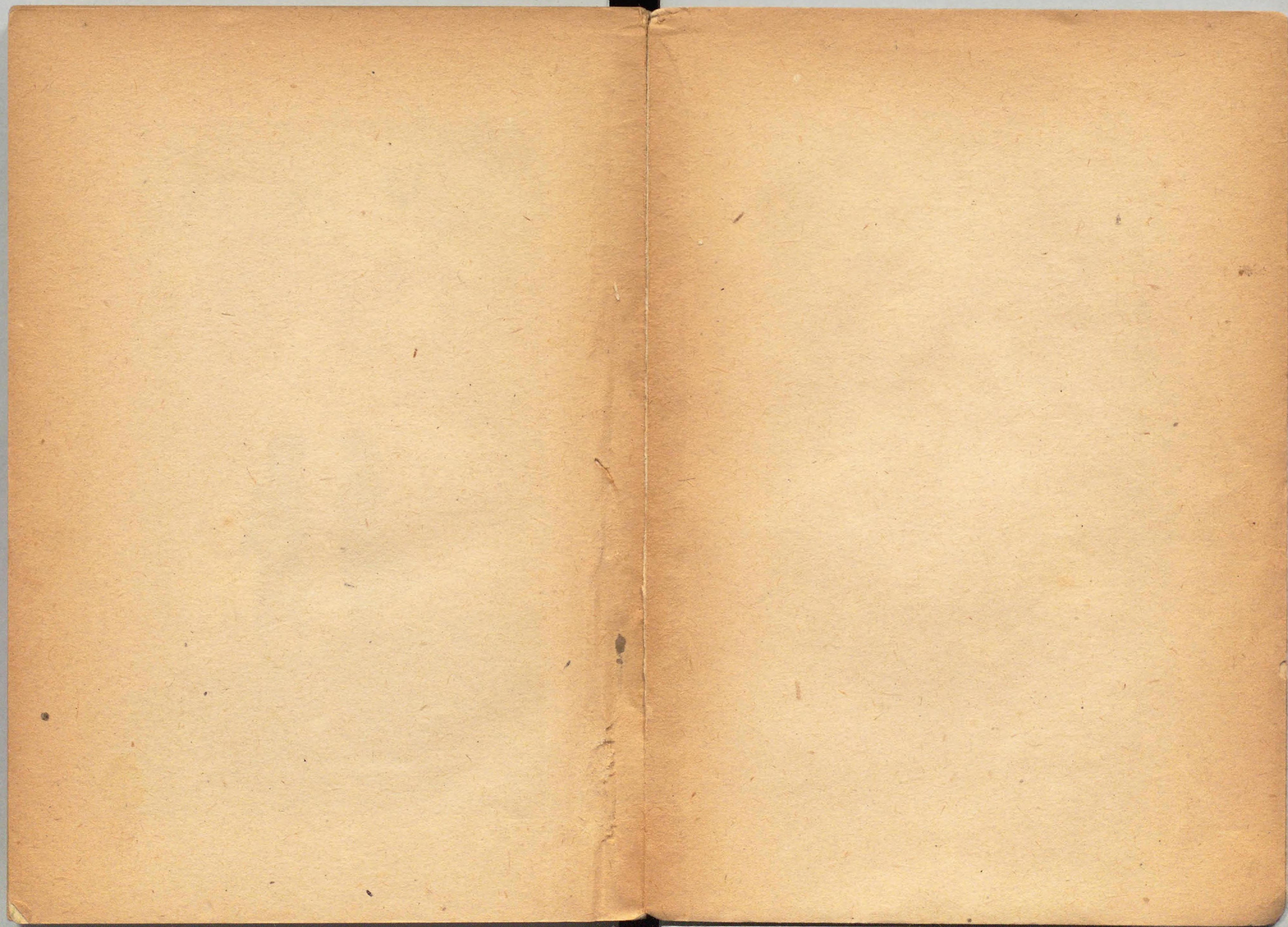


福田正夫

乙女星座

九〇円

恐ろしい罪を犯した人を父に持つ佐代子は冷たい人の
眼に追われて山深い草庵の老尼の胸に抱かれていた。
亡き母の子守唄をまぼろしに聴いて夜空に輝く乙女星
座に祈る佐代子は余りにも悲しい運命の子でした。



絹糸草

福田正夫



49
H-52



目次

| | | |
|-----|----------|----|
| 第七章 | 夢の絹糸草 | 一九 |
| 第六章 | 美しき心の國 | 一六 |
| 第五章 | 罪をめぐる人たち | 二九 |
| 第四章 | 暗い壁 | 六 |
| 第三章 | 放火犯人の家 | 四 |
| 第二章 | 少年アルバイト | 四 |
| 第一章 | 父を求めて | 六 |

表紙・さし繪 渡邊郁子



絹きぬ 糸いと 草そう

福田正夫



星ほしはそのおちるとき

かあつと燃もえるんだよ

青あおくさみしく

尾おをひいて光ひかるんだよ

第一章 父を求めて

そこは北の國の小さい村、富山縣水橋のほとりの海辺でした。

八月もおわりに近くなると、海はそのやわらかい心をなくして、白い泡を立て、荒れてくるのでした。秋風は西の海より来るや……と詩人のうたつたように、西風の日は、それが特別にはげしく、岩にうちよせる波が狂うように鳴り出していました。

澄三は丘の上に立つて、風に吹かれながら、その海をみつめていました。

(あゝ、きょうも父さんは帰つてこない)

澄三の思うのは、悲しいそのことばかりでした。

小さい漁船の船頭さんをしている父が、勇ましく沖に出て行つたのは、十日ほど前のことでした。いつもなら、三四日目ぐらいに沖から姿をあらわすはその船が、いままも帰つてこないのは、きつとわけがあつたにちがいありません。そして澄三にも、父さんは、もう帰つてこないかもしれないこ

とが、わかつていました。

少し前から病気でねついている母さんが、こつそり泣いていたり、年を老つたおじいさんが、ひそひそと近所の人と、話をしているのをみつけたりしたこともあるのです。澄三はそれを見ると、自分もかげにかくれて泣きました。

けれど、小さい澄三は、大きな手で頭をなでてくれながら、

『帰つて来たぞ、大漁だぞ』

と笑つてくれる父を、けつして忘れることができませんでした。

(どんなに海が荒れたつて、父さんにかぎつてそんなはずがない)と小さい心に思うと、たまたまなくなつて、海岸にかけ出しました。

(きょう、たつたいま、父さんの船が見えるかもしれない)

澄三はそう考えると、胸をわくわくさせながら丘の上にかかあがつて、曇つた沖をみつめるのでした。白い波、かすんでいる空、海はとおくひろく荒れて、船の影もなく、小さい澄三の胸をかきむしりました。

『あゝ』

それはさみしいというよりか、胸のなかで、火のように熱くなる心持ちでした。

(父さんもう帰つてこない)

そう思うと、澄三は泣きたくなるのを、じいつとこらえて、丘の松の根もとに、腰をおろすのでした。こらえてもいくらこらえても、涙は熱くのをふさいで、頬を流れ落ちました。

『男は泣くもんじゃあないぞ』

自分で自分にそういいきかせると、それもいつか父さんがいつてくれたのだと思い出して、なお悲しくなりました。

——きょうもまたそうして、澄三はたつた一人で、丘の上に立つて、父の船を待ちながら、海をみつめて唇をかみしめていたのです。

(もうだめだ)

と思ひながらも、澄三はあきらめきれませんでした。

うしろの山の蔭を汽車が走つて行く、あゝ、父さんはあれで帰つて来わしまいか、そんなことを考えて、すぐにそれもうち消してしまいました。

(船で行つたものが、汽車で帰るなんてことがあるものか)

とおい沖で船が沈んで、父さんはそれからどうしたろう。父さんのことだから、泳いで孤れ島にいつているかもしれない、と思つて、それをさがしに行きたいような氣になつても、小さい自分がどう

していいか、それを考えきれないのでした。そしてほつと吐息をして、小さい胸には、せおいきれない苦しさを、声に出して見るのでした。

『おゝい、おゝい』

けれど、海は答えてくれませんでした。泣きながらよんでも、海はだまつていました。海はにくりしいほどひろくて、重い鉛色で澄三の心をさびしくしてしまふのでした。そしてやがてうなだれたまゝ、澄三は村の方に帰らうとして、悲しく丘をおりかけると、

『おや』

と立ち止まつて、そこから脱兎のように、海べの方へかけ出して行きました。

『大へんですよ。早く、早く、来てくださいよう』

女の子の声が、丘までひびいて来たからです。

二

海べには人影もなく、岩の上のぼつて叫んでいる、その少女のすがたが、たゞ一つ空に浮いてるようでした。澄三はそこにかけてつけて、少女に呼びかけました。

『どうしたの、どうしたの』

『死んでまう、弟が』

『あ』

澄三は、すぐに溺れかけている、子供を見ました。そして、手ばやく着物をぬぎすてると、荒れくるつた波のなかにつきすゝんで、それをもぐりぬけました。そして、すぐに潮にもまれている子供の方へ、泳いで行きました。

『しつかりして、すぐ行くから』
と澄三は叫びました。

その子供はもがいて、水の上に浮かんでいるのが、やつとのものでした。それは少し泳ぎができるので、そこで水にはいつているうちに、潮さきにまきこまれて、それにのせられてしまつたのでしよう。

この地方で、とよと呼ばれるのは、反対がわからながれてくる二つの潮が、そこでぶつかりあつて岸から沖へと、川のような流れをつくるおそろいのものでした。たまにしかないけれど、時によつてはげしいのになると、数百メートルの沖まで、人をさらつて行くほどの力を持つているものもあるのです。

子供をまきこんだのは、それほどでないにしても、かなりつよいものでした。とよをしらない子供はそれにもまれて、もうつかれ切つていました。

澄三は、子供に近くなると、

『流されてもいゝから、しつかりして……いゝかい、かじりついてはだめだよ』

と、注意することをわすれませんでした。そして子供が、りこうそうにうなずくを見て、それを肩にすがらせました。

子供は、息をせいせいさせて、澄三の肩に片手をおきました。

『あゝ』

ほんとに、その潮ははげしく流れていました。それにさからうことは、どんな泳ぎが上手でも、できないうことでした。が、澄三はすぐに子供にいいました。

『横に切るんだよ。手間はかゝるけれど、きつと陸に帰れるからね、いゝかい』

『うん』

『やめ』

澄三は、ゆつくりと、潮に身をまかして、横にその流れを切つて行きました。その間にかなり沖へ流されましたけれど、とよの流れをとおざかると、そこはずつと波がしずかでした。

澄三は、子供の片手を肩におかしたまゝ、流れの中心にまたはいりこまないように、なぐめに潮のくる方へむかつて、岸をめざしました。子供を助けたがら泳ぐことは、かなりむずかしいことでした。

が、澄三はあわてないですゝんで行きました。

『あゝ、岸がだんだん近くなる』

『そうだろ。そのつもりで、元気をつけたまえよ』

『うん、ありがとう』

でも、子供はくるしそうでした。そのくせ澄三がつかれるだろうと、あいている手で水をかくのでした。

『もう、もう少しだからだいじようぶ……君は泳がないでもいゝよ』

『うん』

子供が少しでも、じぶんの身をかるくしようとしているのに気がついて、澄三はいゝました。が、自分もすつかりつかれているのでした。それを岸の石から石をつたわつて、その姉が手をふつて呼びました。

『おうい、もうすぐよ、もうすぐよ』

澄三もそれにいきおいづけられて、よわつてくる力をふるいおこすのでした。そうしてやがて、やつとこのことで、岸につくことができました。

子供は澄三に助けられて水からあがると、ぐつたりして、そこにねそべつてしまいました。そこに



IKUKO

きた少女は、

『よかつたわ、よかつたわ』

と涙ぐんで、ぬれるのもかまわず、弟をかゝえました。

『あなた、ありがとう、ありがとう』

その少女は、それからまた澄三に、いくたびとなくお祝をいいました。

その姉弟は、この町の者でもないし、近くの村の者でもなくて、どこか遠くからきた、街の者であることが、澄三にもすぐわかりました。姉の方は、澄三より二つ三つ上のようで、

(うちの姉ちゃんより下だろ)

と思われました。そして弟の方は、自分より一つぐらい下らしく、姉にだかされると、ぶるぶるふるえながら、もう口もきけませんした。澄三はその二人をみつめているうちに、自分もさむくなつて来たので、

『早く、着物をきせてやるといゝよ』

といゝすと、自分の着物の方に帰ろうとしました。

『あ、待つてよ』

その姉は驚いて、白い顔をあげました。そして、ふところから、赤い絹の墓口を出してさし出すと、

『あなた、この村の人でしょ』

『ええ』

『これ、ほんのお祝なの、とつてよ。石川のおじさんところに来て、すぐ富山に帰るんだわ。邦雄さんが叱られるといけないから、だれにもいわないでね』

『いゝです。いゝから、早く着物をきせるがいゝです』

澄三がそういうと、

『そんなこといわないで』

と少女が呼ぶのをあとにして、

『いゝんだつたら』

と走り出しました。

『あら、待つてよ』

といわれても、澄三はなお恥ずかしいような氣持ちがして、そこを逃げて行きました。

三

岩から石へ、石から岩へまた石へ、澄三はそこをとびあるくのになれていましたから、まるでうさぎのようでした。やがて着物をひろいとると、それをかゝえたまゝ走りしました。そうして、息を切ら

せながら、丘をこえると、その下でやつと立ちどまつて、着物を身につけました。そのくせに、
(あの弟も、着物をきて、そろそろ帰りかけたろう)

と海の方をみかえると、すぐにうなだれてしまいました。それは、また父のことを思い出したから
でした。やがて悲しくとぼとぼと、澄三は父のことを考えながら、貧しい家に帰るのでした。

村に来て、澄三は門がまえの医者家の前に、小がたの自動車がとまるのをみつけました。

(石川さんにだれかきた)

澄三はひげのこい紳士が、車からおりるのを見ました。二人のお父さんかもしれない、澄三はそん
なことを考えながら、そこをとおりぬけたのでした。

澄三の家は、村はずれの道ばたにある、小さな家でした。

『たゞいま』

澄三が、小声につぶやいて、裏口にまわると、そこにはおじいさんの松吉が、なにやら考えこんで
いました。いつもなら、にこにこしてくるおじいさんも、しんばいそうに首をふつていたのでし
た。

『帰つたか』

『うん』

『丘へ行つていたんだな』

澄三は、だまつてうなずいて、涙ぐみました。おじいさんは、それを見て見ないふりをしましたが
やつぱり涙をためて、急にはなじるをすゝりあげました。そして、すぐにほかのことをいうのでし
た。

『母さんの薬をもらいに、行つてきてくれろよ』

『姉ちゃんではだめなの』

『姉ちゃんの帰りは、日がくってからになるからな。——薬はもうないんだよ』

『うん、行くよ』

澄三はすなおにいゝましたが、石川さんに薬をもらいに行くのが、ほんとはいやでたまらなくて、
船主の家にひるまはたらきに行つている姉のおよしが、

(夜、とつてきてくれるといふけど)
と思つていました。

石川さんは、年をとつた、それは親切なお医者さんでしたけれど、薬をつくつてくれる書生がすぐ
ちやなことをいうのでした。

前のときにも、薬の代を持つて行かなかつたので、

『もう三四どぶんたまつたぞ。こんどまとめて持つてこないと、薬はやらないぜ』
とすけすけいわれたのです。

母さんは病気でねているし、父さんは海から帰つてこないし姉のおよしも、

『父つあんが帰らなくては、その日にもこまるだろう。うちも人手が少なくてよわつてゐるから、おまえかせぎに来な』

と船主さんからいわれて、毎日行つてゐるのです。

ですから、そうしたことをいつたところで、神経がいたんで、手の利かないおじいさんに、どうしようもないことは、澄三にもよくわかつていました。

(父さんさえいれば)

と思うと、澄三の小さい胸は、また悲しくなつてくるのでした。

澄三が家にはいると、母はすやすやと眠つていました。

『……………』

澄三はせめて母にそれをいつて、きょうの分だけでも、薬代を持つて行きたいと、思いましたけどそれもできずに、そつと枕もとから、薬瓶とふくろを持つて、また家を出たのです。

そしてうなだれたまゝ、石川さんの門口まで行くと、悲しくそこにたゞすんでいましたが、どうし

でもなかへはいる氣になれませんでした。

『おや、こゝにいたのね』

『あ』

そこには、海べから帰つてきた姉と弟が立つていました。

少女はすぐにいうのでした。

『さつき、なぜ逃げてしまつたの』

『ね、これ……もらつてよ。そのかわりだれにもいわないでね』

澄三のふところ、少女は赤い蕁口をおしこむと、にっこり笑つて行つてしまいました。

『あ』

澄三は、そのあとを追おうとしました。

『いゝんだよ、ぼくの恩返しだもの』

弟がそれをとめました。

『ね、だまつてゝね。でないと、ぼくきつとしかれるから……あした、遊ぼうよ、朝のうちに来てね。ぼくも君に本をあげるよ』

澄三はだまつてうなずくと、二人を見送つて立ちすくんでいました。そして、ふところをおさえる

と、そこから走つて、人のいない家の蔭に行きました。赤い墓口をそつと開いて見ると、なかには百四枚が二枚と、ほかに十四枚も六七枚あるのがわかりました。それはたまつた薬代をはらつても、十ぶんあまるほどでした。

『あゝ』

澄三はふるえる手で、それらの札をにぎりしめました。そして墓口をふところにおしこむと、また石川さんの門口へ、引つかえして行きました。うれしいというよりか、泣きたいような悲しさで胸がいつぱいになつてしまいました。

四

翌朝、澄三は姉弟にあつて、その墓口だけはかえそうと思ひながら、石川さんの門口をうろろろしていました。

門のなかから、洋服をつけた弟の方が出てきました。

『あ、遊びにきたの』

『えゝ』

『だめになつちやつたよ』

その弟は、氣のどくそうにいゝました。

『父さんがきのうから迎えにきているの。で、きよう帰ることになつたんだよ。あゝ、そう、そう、ぼく本をあげるよ』

その弟は、急になかにかげこむと、しばらくして、きれいな本を二冊かゝえて出てきました。

『ぼく、読んじまつたから、持つて帰らなくていゝんだよ』

『いゝんです』

澄三がことわつても、その弟はそれをゆるしませんでした。そして、やがて、少女も出てきました。が、墓口をそつとかえすひまもなく、姉妹はその父につれられ、石川の家の人たちに送られて、いそがしそうに立つて行きました。

澄三は本をかゝえたまゝ、ふところのなかの墓口をおさえて、それを見送りました。にぎやかなその人たち、——澄三はやがてなんとなくさびしくなりながら、家に帰つて、ぼんやり考えこんでいました。

九月になつても、父の船は帰つてきませんでした。

『あきらめたがいゝぞ』

おじいさんにそういわれても、澄三は丘の上に立つことをやめませんでした。

姉のおよしは、朝くらいうちに船主の家にはたらしにだきに出かけて、夜も日がくれてやつと帰ってくる
と、くたびれ切つてねるばかりでした。はじめは、夕はんはうちでと、きめられていましたが、それ
もいつか先方ですましてくるようになりました。

『たまには、家でもおたべな』

と病氣の母がすゝめると、

『え』

とすなおに返事するおよしは、ちらつとほおえむきりで、けつして箸をとらないのを、澄三も気が
つきました。

(ごはんをけんやくしてゐるんだ)

とわかるのです。それがたまらなくさびしくなりました。

そんなとき、母さんも苦しそうに目をふせてしまふし、おじいさんもうなだれてしまいました。い
いたくてもいえない悲しさで、だれもだまつていると、やさしい姉のおよしは、うるませている眼を
あげて、

『もうおそいわ、あしたわたし早いから、みんなやすみましようよ』

と自分のせいにして、いゝ出しました。

『澄ちゃんの学校も、あさつてからね。あしたは帰るとき、おかみさんから卵をもらつてきてあげる
わ。澄ちゃんのおべんとうのおかずにして、のこつたら母さんがたべられるでしょう』

『ほく、あさつては、早帰りだよ』

澄三は卵ときいて、いちど元氣づいたものゝ、すぐしおれると、

『せつかく、あたらしく中学でべんきようできると思つたら、……こ、こんなことだから、ほく、ほ
く、もう中学に行くのいやになつたよう』

といつてしまいました。はつきりいゝ切つてしまつて、

(あ、わるいことをいつてしまつた)

と氣がついたのですが、もうとり返しはつきません。涙をいつばい目にためているのを、病氣の母
もおじいさんも、その姉もみつめました。そして、母は、ほろほろと涙をこぼすのでした。こらえて
いたすゝり泣きのこえが、澄三の胸からあふれ出てきました。

姉のおよしは、氣をあげまして、せぐりあげてくる悲しさをこらえると、いきなり澄三の手をつか
みました。

『こらえるんだよ、こらえるんだよ。父さんがいなくなつても、兄さんがシベリヤから帰つてくれれば
なにもかもよくなるんだからね』

あついで涙が、澄三の手にかゝつて、その心が、小さい胸にしみとおつてきました。

『ごめんなさい、ごめんなさい、姉さん』

澄三がいゝました。

『ぼく、どんなにつらくとも、きつとしんぼうするよ。姉さんこそ、つかれているんだもの、ぼくのことなんかしんばいしないで、早くねておくれよ』

『そ、それがいゝ』

おじいさんもうなずくと、まつさきに立ちあがりました。そして、納戸の小さい部屋に、いつものように寝に行くのでした。

『さあ、澄ちゃんも早くおねよ』

姉も涙をふいてねどこをとるのでした。

あかりを消して、母と枕をならべて三人でねると、そこにも悲しく夜がふけてきました。あたゝかいねどこにねむつて、うれしい夢をみている子もありました。こゝではやぶれた古いたゝみの上で、ぼろぼろの夜具につままれてねむるのでした。でも、どこでもおなじに、星はやさしい光をこめて、この子供たちを見おろしながら、

『いつも夢だけはしあわせでね』

と、キラキラかゞやいてくれるのでした。

五

新制中学の第二学期がはじまつた日、澄三が帰ろうと廊下を歩いてくると、むこうから佐野先生がきました。英語をうけもつている、まだわかい女の先生でした。

そばにいくと、ぼつとほおをあからめて、

『ちよつと』

と澄三をひきとめました。

『父さんのことわかつて、高木さん』

『あ』

澄三は先生を見あげました。

『先生、父さんのこと、知つていらんですか』

『えゝ』

佐野先生はうなずくと、澄三のかたに白い手をおきました。

『新聞でも見て、しんばいしていたのよ。一つちがいのわたしの兄が、あなたの兄さんと徒歩競争で知りあつて、滑川へは、あなたの兄さんがあそびにきたこともあるわ』

『そうですか』

澄三はうれしそうでしたが、すぐしよげると、さびしそうにいきました。

『父さん、まだ帰らないし、どうしたのかもわかりません』

『兄さんも、ですの』

『いゝえ』

澄三は、うるんだ目をかゞやかせました。

『兄さんはじようぶらしくつて、安心してまつようにとたよりもあつたんです』

まぶたがぬれてきたのは、父や、母などが、

『いつ、帰るか』

『もう、帰るだろう』

と、まぢくたびれていたことを、思い出したからです。

その兄さんの松一は、富山縣でも一二をあらそう、四百メートル競争の選手だったので、その弟であることを、澄三もほこりとしていました。そして、おさない心のなかで、

(ぼくだつて)

と思つたこともありました。

(でも、そんなことあきらめるんだ)

と澄三は先生の白い手が、肩の上でふるえているのに気がつきました。それは、この生徒のことを自分のことのように心配してくれてるにちがいないのです。

『ありがとうございます、先生』

と澄三はやつといきました。

『しつかりやんなさいよ。どんなふしあわせでも、それにまけないでね』

『は、はい』

澄三はていねいに頭をさげて、わかれて行きました。きつとくちびるをかみしめて、泣きたくなるのをがまんしながら、そとへ出ると、

(やさしい先生だ。佐野先生、兄さんにあつたこともあるんだ)

と、うすぐもる日の下を行くと、村はずれでわざわざ裏道にはいりました。それは、どんなにこらえても、ぼろぼろ涙がこぼれてきて、それをどうしてもとめられないからでした。泣いているのを、ひとに見られたくないと、そう思うせいもありました。

道は小川にそつてくだと、やがて海べの丘の下に出ました。

澄三はたまらなくなると、その丘へのぼつて行きました。その松林をこえると、いつも澄三が立

つとろがりました。北はくもつた空の下に白く波だつ秋風の海で、海岸にうちよせられた石も、波に洗われる岩も、白々とさみしく死んだものゝようにうごきません。人影も見えないから、そこにはたゞ風の音ばかりが、ひゆうひゆうと声立て、ひとりぼつちの澄三にふきつけてくるのでした。

それは、澄三の悲しみを、北の海が呼んでくれて、

『おいで、おいで』

といつているような気がする、まつびるまでした。

さみしくひとりであるまひるとき、——苦しみがいっぱいな人は、ふいと魔物のようなものにさそわれることがあるといわれますが、このとき、小さい澄三の、やるせない心にきたものも、この魔物かもしれせん。ほんとに澄三は、このとき海がその手をひろげて、

『悲しくばこゝにおいで、わたしが抱いてあげる』

といつてくれたと、思つたのでした。

『父さん、父さん』

澄三は風のなかで、海にむかつて父を呼びました。

『行くよ、わたしも行くよ』

とさけんしたのは、声にならなくて、心のなかだけだつたのかもしれない。が、とにかく、澄三は、丘からまつすぐに、風にむかつてつきすゝむと、なれた足どりで岩をこえ、石をふみ、やがてしづきの立つ海の岸へまでくだつて行きました。

波が足もとでくずれて、ざざざざざざどぶうんとひいて行きました。それをあそれるのでもなく

澄三はいま波でぬれた石に足をかけました。

目がすわつて、むちゆうなのです。

もう一足すゝめば、そのからだは海におちこんで、波がこれをのんでしまうでしょう。波でぬれた石もぐらりととして、

『あぶない』

と声を立てたようでした。

六

そのとき、沖の方に、さあつともれ日の光がかゞやきました。雲をわつて、そこに青い空があらわれたのです。そして、まつくろい人影が、岩の間から、ぬらつと立ちあがりました。

『あぶないよ』

と声をかけたのは、その人でした。

澄三は、ぎよつとして、その人をみつめました。

ぎよろりとした目、いつ手をいれたかわからないよもぎのような頭髮、ぼろぼろの着物を前はだけにつけて、なわのおびをしめているのは、いつから村に住みついたのか、このへんですつかり有名になつている、半馬鹿のこじきのひろさん、それがあかだだけ、ひげだらけのくろい顔で、にやりと澄三を見あげたのです。

うしろにもれ日の光をしょつて、ひろさんはまた、びしよぬれのまゝ、

『貝をとつてるんだよ、ふゝゝゝ』

という、すぐもとの岩の間にもぐりこんでしまいました。

波が、また足もとまでおしよせてきたので、澄三はあわてゝとびのきました。そして岩のかげをのぞくと、目をあげて、沖遠くもれ日の光がはしるのを、祈るようにつめめました。そこになにかふしぎな力があつて、

(父さんは、きつと帰つてくる)

と感ぜずにはられませんでした。

すると、あたらしい力が、またむくむくと胸にもりあがつてきました。遠いシベリヤにいる兄の松一が、

『いくじなしめ、いのちを大事にしろ』

ともいつてくれているような、そんな気がしました。

(よし、泣くもんか、海なんかにはさそわれるもんか。どんなにつらくても悲しくても、もつともつとやるんだ、生きて生きて生きぬいて、ほんとのことをやりぬくぞ)

と心がいきいきしてきました。そのくせ、いつかそこにひさまずいて、祈るように手をあわせると、ぼろぼろと涙をこぼしているのです。じつと目をつぶると、まぶたのそこに、海に出て行くときの父の姿が、やきついていました。

『父さん、早く帰つてきておくれよ』

とせつなく呼ぶ心の声――。

目をあいて沖を見ると、ほんのちよつとの間に、もれ日の光がきえてしまつて、空はうすぐろくにごつていました。北風もしぶきをはこんできて、からだをしつとりとぬらしてしまいました。

澄三は立ちあがると、胸をはつて、

『曇れ、くもつてこい。どんなにくもつたつて、まけるもんか』

と心でさげました。

さつき海へさそいこもうとした白い波が、また海いつばいにひらがつてくると、それが澄三にこた

えるようになっていました。

『よし、やれつ、やれつ、ざざざんざざ、ざざざんざざ、ざざざんざざ』

(ひろさん、またなにかのとき、おれいをするよ)

澄三はそう風のなかで心にさよやくと、

『じゃ、さよなら』

と、だれにもなしにさげびました。それは、まだ帰らない父へのあいさつでした。また白く波だつ曇つた海への、かいがいしく生きる少年の言葉でした。

澄三は涙をはらうと、くるとふりむいて、風におわれながら、いつさんに海岸から丘へかけのぼつて行きました。いつも立つところになると、海をみかえつて、なんとなしに手をふりました。澄三がまつ毛のなかから目をかどやかしたのには、

北の海よ、波立つ苦しさを

おまえもこらえているんだね

それだもの ぼくもぼくも

じつとこらえて

きつときつとやりぬくよ

北の海よ 風にくもつて

おまえも泣くのか

涙をこらえて心で泣くのか

よしよし ぼくも

心ですくり泣こうとも、

よい日がくるのを

涙をこらえて待つてみせるよ

と思うからでした。

やがて澄三はそうした気持ちで、風にふかれながら、家に帰つて行きました。そこに、どんなにくるしくても悲しくても、やりぬいて行こうと、この少年を決心させるものがあつて、村のほそ道をたどらせるのでした。

第二章 少年アルバイト

それからの四五日、そこに澄三にとつて、あきらめ切つた日がつゞきました。

荒れくるつた九月の海をみつめながら、そつと泣きたくなると、心をおししずめて、遠くの沖をみつめるのでした。時としては、丘の南がわにねそべつて、もらつた本に読みふけつたりしてました。父のことや、病氣の母のことを考えると、いつも泣きたいほど悲しくなるのでした。が、
(なにおつ、泣くものか)

と澄三は、自分にいゝきかせました。

ある晩、姉のおよしがいゝ出しました。それは、澄三の学校のひまに、漁場ではたらくつもりならば自分のかせぎからも少しずつ返えすことにして、船主の家で、病氣の母が富山の病院にはいれるほどのお金を、

『役立てゝもい』』



といつてる、という話なのでした。

『どう、澄ちゃん、あんた母ちゃんのために、アルバイトしてあげられる。石川さんも、しんせつに手術すれば、きつとなおる』

といつてくださつていらっしゃるけど、ね』

およしはまだ少女なので、はつきりきめかねて、まよつていました。それを、澄三がすぐに元氣よ

く、
『行くよ、ぼく、小さくたつてはたらいてみせるよ』

とはつきりいいました。

『よし、その話、おれがすぐきめてくる』

とおじいさんも、立ちあがつて出て行きました。

病氣の母は泣きだしました。

『みんなに心配させるのに、おまえにまで……、すまないよ、澄三』

『いゝんだよ、母ちゃん』

『でも、おまえまで、学校へ行つて、おまけにはたらかせるくらいなら、わたしは手術なんてしなくてもいゝんだよ』

『だめだい、母ちゃん、そんなに氣をつかつちゃあ』

澄三はいゝました。

『はたらくのは、ぼくすきなんだもの、それで母ちゃんの病氣がなおれば、こんないゝことはないじやないか』

『でも、これから冬がくるしねえ』

『そんなこと……、姉ちゃんだつて、働いてるし、冬はどこにだつてくるんだよ。雪がおおいつたつて、兄ちゃんのいるシベリヤでは、零下三四十度の寒さもあるつていうよ。それを考えれば、なんでもないよ』

とどこまでも、澄三はけなげにいゝはるのでした。

夜道をおあるいて、おじいさんが帰つてくると、この話はすぐにきまりました。あくる日から、澄三は学校からずつと漁場の納屋にまわつて、そこではたらけることになりました。

『氣のあらい連中ばかりだけんどな、いうことをきいて、よくすれば、かあいがつてくれらあな。わしもずつとあそこになら、組合長さんと話をきめたあとで、帰りに川ばたのおじいさんのところにもよつて、みんなによくいつてもらおうようにたのんできたがから、おめえもそのつもりでやれよ』

とおじいさんは、少しでも役に立つたのをよろこんでいました。

漁場の書記をしている、川ばたという家の主人は、父さんともなかよしだったので、澄三もよく知っていましたから、

『うん、ぼくアルバイトだつて、みんなにさすがに父さんの子だつて、いわれるように働くよ』
と、うなずいたのでした。

その母も、おじいさんになぐさめられ、わが子のおよしや澄三のけなげなようすを見ては、
『お金がかゝるから』

ともいつていらなくなつて、病院に行くことを承知しました。そしてそのあくる日から、まだ中学一年の澄三のアルバイトがはじまりました。

三四日すると、母も富山の病院へ、およしにつきそわれて出かけました。

『すまないねえ、あとをたのみますよ』
と涙を眼にかべてのわかれでした。

『はやく癒つて、帰つてきてね』

と澄三が、学校へ行きがけに、そういつて出て行くのへ、姉のおよしがいよみました。

『手術がすめば、わたしだけでも帰つてくるからね』

『いよ、わかつてるよ』

澄三は、ふりかえり、ふりかえりしながら、心のなかで、

(神さま、父さんを返してください。そして母さんの病氣もおしてください)

と祈りました。それから学校での一日がすむと、漁場の納屋にまわるのでした。そしてそこで、荒らい氣性の大人たちに、いつものように追いつめられるのでした。

夜になつて家に帰ると、待つて居るのはおじいさんひとりになっていました。疲れきつた澄三は、

『おじいさん、おねよ』

といつて、さびしくひとりで、部屋にねるのでした。これが、この夜からの澄三の毎日になつたのでした。

二

でも、その夜のひとりねには、ときどき、このさびしい澄三に、楽しいこともありました。それは、夢で父がふいに帰つてきていたり、兄の松一が、

『おう』

と顔を見せることもあつたからでした。母までも癒つて、そこにいたりしました。

けれど、それが目もさめれば、やはり暗いひとりの部屋に、ねている自分なのでした。かえつて悲しくて、泣きたくなつてくる、それをこらえて起きなると、北の國にはじまつた北風が、ひゆうひ

ゆうとすきまからふきこんでくる音がしました。

すると、澄三は、すぐあかりをつけて、ねどこのなかで、学校の本をひろげました。そつとおじいさんにも知れないように、アルバイトでできない勉強をしていると、そのうちに夜があげてきました。

おじいさんが起きて、朝のしたくをはじめると、澄三もすぐおきてしまいました。おべんとうは自分でと、不自由なおじいさんを手つだいました。

そうした毎日の勤め、そのうちに、秋はいつの間にか、早くもその海へにおとずれてきました。

九月のすえになつてから、澄三の父のついていた船の道具が、遠い能登の岬の村に、流れついたことが、そこに知らされてきました。夜おそく帰つてきた澄三に、おじいさんはいうのでした。

『なにごと、神さまのおぼしめした。兄さんだけは、きつといまに帰つてくるんだから、父さんはあきらめるんだぞ。まだよくならない母さんに、それを知らせないようにしてな』

『……………』

澄三は、だまつてうなずきました。

澄三は、おじいさんが、いろいろなことで、どんなに苦勞しているか、よく知っていました。病院

というものは、たいへんお金のかゝるところで、母さんは手術をしてから、おとしぐあいがいゝのですけれど、まだ長い間、いなくてはならないのに、お金がたらなくなつてきていました。そして、おじいさんはそれをこしらえるため、不自由なからで、親類まわりなどしていることも、みなわかつていました。

姉のおよしが、村に帰つてきて、また病院にもどるとき、そんな話をひそひそとおじいさんとしているのを、澄三がきいてしまつたのです。

親類のなかでも、お金を持つている家は、親切でなくて、どうたのんでも、それをつごうしてくれないことも、知っていました。

『お金を母さんに送つたの』

澄三がそうたずねると、おじいさんは、あわてゝこたえました。

『いゝよ、いゝよ、おまえは心配しなくていゝのだ』

おじいさんはげつそりやせて、くぼんだ目を心配そうに光らせながら、いつも悲しそうにしています。それをみていると、澄三はなにもいうことができなくて、ほつと、小さい胸から、といきをするばかりでした。自分は漁場の納屋で、せめて夕方のご飯だけは、たつぶりをたべてこられるのですけれど、おじいさんは、なんにもたべないのではないかと、考えて、さびしくなりました。

でも、澄三は、

(おじいさんの前では、どんなに悲しくても、泣くまい)
と思つていました。そのうえ、また心配させることが、ほんとにわるいことのようにも、考えられるからでした。

ですから澄三は、父さんを待つていても、むだだとわかつたとき、胸のなかで、わつと泣き出したのをこらえました。そうして、すぐに立ちあがつて、そとに出て行こうとしました。せめておじいさんのいないところで、そつと泣きたいと思ひました。

『どこへ行くんだね』

おじいさんは呼びとめました。

『……………』

澄三がこたえられないでいるうちに、おじいさんは、自分であきらめるんだぞといつておきながらすゝりあげて泣き出してしまいました。

『澄三、こゝにいてくれ、わしはさびしいのだ、あゝ……………』

澄三はかけよつて、おじいさんにしつかりと、抱きついて叫びました。

『許してね、許してね』

小さい胸は、焼けるようにいたみ、こらえきれないで波をうちました。そして、涙が頬をつたわつてながれると、おじいさんの手に、熱くはらはらと、降りかゝりました。

『お前もわしも不幸せだのう』

おじいさんは、不自由な手で、澄三の頭をなでながら、自分も熱い涙を流していました。そうしてまた、なにかを考えて、じいつと澄三を抱きしめながら、いつかうつらな目を天井にむけて、青白く沈みこんでいました。

三

澄三はすゝり泣きながら、やがてそつとたずねました。

『なに考へているの、おじいさん』

『うむ』

おじいさんは、悲しくうなずきました。そしてまた、涙をながしました。

『お前の父さんもかあいそうだ。死んじまつて、お金を残したよ。郵便局に保険がしてあつたから、せめてあしたあれをもらつてこよう。わしは忘れてたんだよ。でもそれを思い出さなければならぬなんて、どんなに悲しいことだらう』

夜がふけて荒れくるつてゐる日本海の波のざわめきが、高くそこにひびいていました。その海のそ

ここに父さんがいるのだ、澄三はそう思いながら耳をすませました。

泣くなよ、荒波

その果てにや

西風と北風の腕くらへ

それは、父さんが好きな船唄でした。澄三は海の底から、そのうたがきこえて来たように思つて、そつと身をふるわせました。それはおそろしいけれど、なつかしさも一しよにひびいてくるのでした。

澄三は、夢のようにうつとりと、そのうたをきながら、おじいさんと二人で、泣いていました。つらい仕事につかれきつていた澄三は、泣きながらさびしい夢のなかに、うつらうつらとはいつて行つたのでした。おじいさんは、それを抱きしめて、いつまでも長く思いつづけていました。

翌日、おじいさんは、郵便局に行きました。

夜になつて、澄三がかえつてくると、おじいさんが、迎えてくれました。

『どうだつたの、保険は……』

澄三がたずねました。

『それがの、くれないのだよ、行方不明ではこまるというでな。でも、いまにとれるならと、局長さんが六百円さきに貸してくれたから、母さんの方に、五百円だけ送つたぞよ』

『よかつたねえ』

澄三は、うれしくて、かえつて、泣きたいくらいでした。けれど、おじいさんはすぐに、うなだれていいました。

『でも、とてもそれじゃ足りないんだぞ。その三倍も四倍も、病院からは、いつてきているんだ』
澄三ははつとしました。それは、胸をつきさよれたような気持ちでした。

『そ、そんなに』

『そうとも……手術もしたしな』

澄三はわくわくしてたずねました。

『そのお金を送らなければ、母さんをなおしてくれないの、え』

『まあ、そうだよ』

おじいさんはそうこたえて、さみしそうな顔をしていました。それからおそろしそうに、身をすくめてつぶやきました。

『こゝで火事でもあれば、家の保険がとれるだがな』

おじいさんはそういつてから、自分でも青ざめて、はつと胸をおさえました。

『ばかなこと……人間はこまつてくると、つまらないことまで、考えるもんだな』

おじいさんは、またうなだれて、そんなことをつぶやいていました。澄三は、おそろしそくに、おじいさんを見つめて、いつまでも、だまつていました。

四

漁場の働きは、苦しいというよりか、ひどいといつていくくらいでした。そこでは、冬にならないうちに、夏の仕事の後かたづけをしたり、すこしでも多く漁をしておかねばならないのです。澄三はアルバイトで、そのうえ沖に出ることは、おじいさんにことわられて、行かされませんでしたけれど、陸の納屋の仕事の方が、その倍も骨が折れました。そしてそこに働いてる大人が、また乱暴な人たちがかりました。口よりか手、叱言よりか打つ方の早いのが、あたらしい世になつても、まだなおり切れない、その人たちのくせでした。

一三日あとの夕方でした。

澄三はその前の夜、また病院から、お金の催促がきたことをきいて、その日は、その心配をして、仕事の間にも、考えこんでばかりいました。そのために、しておかねばならなかつた夜船のしたくを

わすれて、ほかの仕事を手傳つていました。

そこへ、腕の強い船乗りの勝吉が、きました。

勝吉はなんにもいわずに、いきなり小さい澄三の頬に、平手うちをくわせて、どなりつけました。

『なまけ者め、なんで給金もらつてゐるんだ』

『お』

澄三はおどろいて、勝吉を見つめました。自分がどういふわけであつたのか、母のことを思いつめていた心は、それを思い出せませんでした。

勝吉は、またすぐに、小さい澄三の肩に、たくましいこぶしをのせました。

『どわすれもんが、どうだ』

『……………』

澄三はうなだれました。

『よせ、考えごとなんかは。こゝじやあ、めそめそしてゐないで、ぐんぐんやればいゝんだ。おれはおめえの掬口ぶつたのが、きらいなんだからな。まてまてしてゐると、こんどはげんこつがとぶぞッ』

『お』

澄三はやつと気がつきました。そして、自分がわるかつたと思いました。「かにしてください、すぐやりますから」

『は、は、やつと思ひ出したな』

勝吉は、そういゝながら、まだ澄三の肩にのせた手をはなしません。

『いゝか、昔はな……、こうした失敗をすると、しおきということがあつて、魚あらいの大だらいの水のなかに、そいつをつるして、頭ごとつゝこんだものだ。おれは、おめえより小さいときから、ここで働いたんで、そんなつらい目にも、二三どあつてきている……』

勝吉は目をかゞやかせると、まわりの人たちをにらみまわしながら、いゝました。

『しおきは、海軍に行つても、もつとはげしかつたんだ』

『……』

『あそこでは、海の水にしたしたふとい綱で、はだかにして、出させたしりを、びしびしなぐるんだ。赤くはれあがるどころか、あとでは便所にしやがむにも、そのいたさでうなるほどやられるので、なぐられたところにくいこむ綱のさきに、血がついてるのを見たこともある。おれたちは、そうしてきたえられて、なんともいわずにしたがつてきた。おめえなんか、世のなかゞかわつたんで、なまやさしくそだてられて、責任をつとめようとしなしいし、しおきのおそろしさも知らないんだぞ。ほんとに』

しおきにかけて、死に目にあわしてやるから、そう思え』

『もうよせ』

だれかどいゝました。

『なにッ』

まだおこつてゐる勝吉は、おない年ぐらのなかまが、うるさいといつたように、とめようとしたので、この怒りを小さい澄三にうつして、ぐつとふとい腕に力をいれました。

『う』

澄三も、よろめくのをこらえて、勝吉を見あげました。

納屋の蔭から、そのとき出てきた男がいて、勝吉の肩をさわりました。

『もうよせよ、はなしてやれよ』

『二郎だな』

『うん』

『おれのこととを、とめるのか、おめえ』

『そうだ。蔭できいてりやあ、すこし度がすぎらあな。つまらねえことに、海軍のしおきを持ち出したりしてよ』

『なにがつまらねえことだ』

勝吉は、また、たけり立つて、澄三をなげとばすように、そこにつきたおしました。

『夜船のしたくはな、冬のくる前の漁場で、沖に出て行くのもいのも仕事だぞ。それを忘れたから、おれがこゝとをいうのをなぜとめるんだ』

『いゝよ、もうそのくらいにしるよ』

『なにおッ』

勝吉は、すぐなかよしの二郎にむかいました。

澄三は、そのあいだに、すばやく立ちあがつて、そこをはなれて行きました。悲しくてもなんでも、わすれていた責任を、自分の力ではたさうというのでありました。

そこでは、いつもなかのよい勝吉と二郎が、けんかをはじめようとするのを、ほかの者が立つてきてなだめていました。それを見ながら、澄三は走つて行きました。目がうるんでいるのは、ひどくしかられたことよりか、母の病院のお金のことを、小さい心にわすれられないからでした。

澄三は、その心配をつゝみかくして、船に櫓をはこび、苦をつくりました。それから、勝吉のすくい網なども、はこびこんで、したくをすませました。そうして、うなだれたまゝ、また納屋の方に帰つてゆきました。そこでは、夕食がはじまつていましたけれど、澄三は胸がいつばいで、それを喰べ

に行くこともできませんでした。

五

涙がほおをながれるのを、澄三はふこうともせず、考えこんでいました。

(父さんがいれば、兄さんが帰れば)

澄三はそれが悲しいのでした。

勝吉が、そこにきました。

『待つてください』

澄三はいいました。

『夜船のしたくは、ちゃんとしてきました……』

『なに、やつてきた』

『えゝ』

『これからも、わすれるなよ』

『えゝ、けつして忘れませんか、許してください』

『やりさいすれば、もういゝよ』

『でもぼくが悪かつたと思います、それで、それで、……』

澄三が、はげしくいゝました。

『ぼく、自分で自分を罰しなければすまなくなりました』

『なに？』

『いまそれをしますから、見ていてください』

氣の荒い勝吉も、もうとつくにおこつたことをくやんでいました。

『あ』

澄三はそこにあつた大だらいに走りかゝると、水くみの手桶をとつて、ざぶざぶと四五はい水をかぶりました。

そしてとめようとするひまもなく、そのなかに顔をつつこみました。

あつけにとられてゐる勝吉の前で、一分、二分、三分、

『ぐすり』

と水のみこむと、さつと顔をあげて、ぶつと水をはいて、につこり笑いました。

『よせ』

勝吉は、はじめて氣がついていゝましたが、まにあわないとわかると、みように苦笑いして、澄三の頭に大きな手をおきました。

『おまえはえらいやつだ』

勝吉がまたおこるかど、澄三が思つたのに、その大きい手は、ぬれねずみの澄三のかみの毛をはらつてやるために、腰の手ぬぐいをとりました。そして、びつくりしてゐる澄三の顔まで、ごしてしゝいてやりながら、すつかり氣にいつたように、

『やつぱり、高木のおじさんの子だなあ』

と目をかじやかせました。

『おれがいくすぎたんだ。あやまるぞ、許してくれ』

『どうしてさ』

『どうしてつて……、おまえを小さいと思つたら、なかなかやるからだ。おれは感心してゐるんだ』

『そうだと』

そこで二郎がいきました。さつきから、そこへきて、そのようすを見ていたのでした。そして、勝吉の手に澄三の手をにぎらせると、自分の手をかさねていゝました。

『二人ともいゝやつだ、しつかりしてゐらあ。さ、みんな仲なおりするんだ。そして、おれたちは澄三の兄きになるんだ』

勝吉もいきました。

『そうだ、そうしよう。三人で兄弟分になろう。』

澄三は、だまつて、うなだれてしまいました。よるべのない、その小さい心を、悲しくさせるような涙が、その目にわいてきました。

『泣くやつがあるか』

二郎がしんみりといきました。

『しかるなよ』

勝吉も涙ぐんでいうのでした。

『ほんとに泣ける者あ、世のなかにたんといないんだぜ』

『それもそうだ』

二郎もじつと澄三を見つめました。

『じゃ、おれは行つてくるから』

大きい手で、ぐつと澄三の手をにぎつてから、勝吉は、大股にすたすたと、行くのでした。いつかそこに三四人きていて、だれもそれを見おくと、ほつと息をつきました。氣象の荒い人たちも、その心の底には、美しい心があるのです。

夜おそくなつてから、澄三は小さい胸のなかに、それを感じながら、とぼとぼと、家にかえつて行きました。

六

風はふくふく、日がくれて

寒かることえてくるからは

北のシベリヤゆめさえも

かようふるさと北の國。

父はどうした、あの母は

さめてあかるい月のかけ

妹も、弟も、この兄を

しとうているだろうこの秋に。

ぼつぼつと、三つも四つも、いや七つも八つも、屋根板に穴があいていて、それが小さい目のようにみえました。かけているぼろぼろの毛布をおして、つかれ切つたからだに、さむさがしんしんとし

みとおつてくるので、高木松一はもうねむれませんでした。

からだのしんが、ちくちくといたましました。このナホトカについてからも、四五日天気がよくて、働くことができさえすれば、ほりよは毎日のようにおい使われました。

(もう、帰れるときまつたのに)

と思うなんて、そんな不平も考えるひまがありませんでした。

(よく、いままで生きていられた……)

その帰國の近いよるこびも、つかれて夜になつてねどこに自分をさがし出して、どうやら一日すんだと思うのが、くるしいほりよ、生活の松一にまだつづいていました。

いまでも目をさますと、

(みんなどうしたろう)

というよりか、空腹にこたえてくる寒さがたまらなくて、

『なにおっ』

とそれをがまんするのが、やつとでした。

松一は、それからふところをさぐりました。寝る前にうすい夕明かりで、なんども讀返したほろほろのハガキを、やみのなかでさぐつてみました。それは、ほりよ、生活をはじめてからの、松一にとつ

て二枚目のたよりで、前のはやぶれてしまつたのでしまいこんでおきましたが、それはまだ讀めるので、シベリヤの奥地から、こゝにはこんできたものです。

高木松一さま、あなたの御無事をきいて、兄もわたしも喜んでいました。御歸國までじようぶでおすごしくださいますよう、遠くお祈りいたしています。おうちもおかわりありません。一日もはやくお帰りなすつてください。昭和二十三年六月一日、富山縣水橋中学校内・佐野みつ子

文はあん記しているので、やみのなかで出してみるまでもなかつたのです。たゞふしぎなのは、家族よりほかのハガキが、どうして遠いシベリヤのはてまでとゞいたろう、ということでした。中学校とあるから、きびしいほりよへの通信を、うまくとおしてくれたのだと、松一は前から思つていました。

その少女だつた人の兄は、滑川に住んでいた運動選手のなかよしでした。
(佐野もよくやつたが、自分もよくやつたな)

とそのじぶんのことを考えるのが、そのハガキの持つてきた、なつかしい思い出で、それがシベリヤ生活でよわつたとき、松一に元氣をつけました。

『こんなことで、さいごにまいつてたまるか』

いまも松一は、がたがた寒さにふるえながら、齒をくいしばつて、それをがまんしながら、心をはげましていました。

いつか、バラックの天井の穴の目玉が、きえてきました。夜が明けかけて、あたりが白んできたのでした。

『よし』

松一は立ちあがりました。

そしてまださむいバラックのそとに出て行きました。体操のように手を上にあげたり、足でとんとん地面をふみつけるのは、松一がほりよになつてから、毎日つづけた習慣で、これで前の日のからだのいたいのをすつかりほぐすのでした。そして、それだけのことで、松一はからだを悪くしないで、その日その日の、はげしくはたらく力を、どうやら持ちこたえて、やつとこゝまで、帰つてきたのです。

松一は、そのまゝほかのバラックの方に行きました。あげ戸のそばによると、それをそつとおしあげました。

『永井隊長どの、もうよろしいですか』

『高木君か』

『はい、そうです』

『きみに、いろいろ親切にしてもらつたので、もうだいじょうぶだ。これならいよいよ帰還となつてもまいらずにすむ。きみたちもこゝまでできてしまえば、どうやらつぎの船あたりで帰されそうだがね』

『うわさは、どうもわかりませんから……』

『いや、ぼくたちが第一船ときまつたのだから、きみたちも第二船か、おそくも第三船だ。こんどこそ、富山で再会できるし、そのときこそ、きみへも恩がえしできる』

『では、隊長どの、どうぞ大事に』

『ありがとう、高木君』

あけはなれた朝を、わかれて自分のバラックにもどる松一を、その中年の人も、なつかしそに見送りました。それは松一にとつてもとの隊長で、こゝではじめてあつたときは、やせ細つて病氣までしていたのを、じょうぶなわかい松一が、親切にたべものまでこんであげた人なのです。

その第一船にのるときまつた人を、松一はふりかえつて、手をふつて、わかれたのでした。

(自分はいつのことか)

そんなことは考えまい、こゝまで来たのだ、どこまでもこらえて時を待とうと、松一はきつとくち
びるをかみしめました。

七

その夜、母の病院のお金が無くなることで、心配をつゞけていた澄三が、しよげきつて家にもどつてきたのは、いつもとおなじに、よほどおそくなつてからでした。表からはいれなかつたのは、澄三がそのことで、なるべくおじいさんと、顔をあわせたくないからでした。

そつと裏にまわつて、澄三ははつと身をすくめました。

(なにをしてるんだろ)

そこにはおじいさんが、ぼろの切をまるめては、それになにかをしめしているのです。よく見ると、それはたしかに、石油の罐からでした。

(どうするのかしら)

そつと見ていると、おじいさんは、利かない手をふるわせて、眼をあげてあたりを見まわしました。その青白い顔が、きつと唇をむすんでるのを見ると、澄三は、おそろしいような気がするのです。しばらくして、おじいさんは、それを片づけて、家にはいつてしまいました。

澄三はそつとひつかえして、また裏に行くために、足音を立てました。

『だれだい』

『ぼく』

はつと吐息をするのが、澄三の耳にまで聞こえました。

『いつ帰つたのだい』

『いま』

澄三はうそをついて、それが、わるいことのような気がしましたけれど、おじいさんが、秘密にしているらしいのを、どうしていゝかわかりませんでした。

(あゝ、焚つけにするんだ)

澄三は、それを考えついて、安心しました。手の悪いおじいさんが、石油とぼろで、焚つけをこしらえることは、前にもあつたのです。

(火でもつけるのじゃないか)

澄三は、そんなことを考えたことが、おじいさんに悪い気がしました。そして、家にはいつてからその日、納屋であつたことを、おじいさんに話しました。

『今夜は風が出そうもなくていゝな』

そのあとで、おじいさんは、そんなことをいつていましたが、澄三は、それも氣にかけませんでした。

た。風のことを氣にかけるのは、漁場の村の人たちのいつものくせでした。そうして、澄三はいつかぐつすりとねこんでしまいました。

そのくせ澄三は、夢のなかで、中学の佐野先生にあつていました。それは、漁場からの帰りの道で（もしかしたら、病院のお金のことを、佐野先生にうちあけてみようかしら。先生のうちは、滑川でも有名な醬油やおみそをつくっている家で、兄さんがうちの松一兄さんとなかよしだから、二人でいづちえをかしてくれるかもしれない）

と考えたりした、からかもしれない。

そのとき澄三は、いくらいゝ人だろうと、わかい女の先生に、お金の話などをするなんていけないと、自分にいゝきかせて、滑川にむいた足を、すぐやめてしまつたのでした。それが、悲しい澄三の、千々に心をくだいたあとでの、おぼれるものはわらにもすがる。

ということわざ通りの、さいごの一つだつたのでした。

その夢のなかで、佐野先生はニコニコすると、足をすくめてあるけない澄三を、どんどんひつぱつて行くのでした。

『さあ、行きましょう。さあ、はやく……それでない間にあわないよ』

と先生はいそぐのでした。

『だめです、だめです』

澄三が、そうことわつても、先生はとてつよいのです。

『そんなことでは、グッドネス・ニュー・ニッポンはできませんよ』

先生はそういつて、澄三をはげますのでした。

よく見ると、その先生が、いつか姉のおよしになつていました。およしは泣きながら、澄三をびしやびしやたゝいて、

『澄ちゃん、澄ちゃん』

とぼろぼろ涙をこぼしていました。

『なにをッ、なにをッ』

澄三は、ゆめのなかで、けんめいにいきむのですが、足がひきつれたようになってしまつて、どうしてもすゝめないのです。

『あッ、兄さん』

澄三は、夢の中で、兄の松一が、佐野先生の兄さんとならんで、どんどんかけて行くのを見ました。それなのに、追いかける自分は、まるで龜のようにのろいのです。そのなかで、澄三は、

『火事だッ』

という声をききました。

(おや、こじきのひろさんの声ではないな)

澄三は、まだゆめのなかで、そんなことを思いましたが、兄さんたちがすうつとかくれてしまったので、いきなりとび起きて、

(あつ、走れる)

と目をさしました。そして、ほんとに、

『火事だッ』

と、さげぶのをきいたのです。その声のおこつたのは、もう瞬に近いじぶんでした。

第三章 放火犯人の家

つらいんです。生きて行くことは
悲しいことも多いんです

愛をつよくつらぬくには。

でも 愛をとおさないで

この世になにがあるでしょうか。

あなたも生きている、あなたも、

だから共に 愛をつらぬいて、

苦しさを くらえ切りましょうね。

—

煙が家のなかをもうッといぶしていました。そして、ぱちぱちと火の燃える音がきこえ、石油の匂いと、こげくさい匂いが澄三の鼻をつきました。立ちあがって戸をあけると一しよに、

『火事だぞうッ』

だれかの声がきこえました。

『おじいさん、おじいさん』

澄三は気がついて叫びました。

『おう』

おじいさんは納戸からよろよろ出て来ました。手には小さな包みをさげて、青い眼をいらいらさせ

ながらいのでした。

『逃げる、なんにも出さな』

それでも澄三は自分の着物をかきさがすこと、学校の本などを入れてある、古い本箱をかき出すことをわすれませんでした。

『火事だッ』

『火事だぞッ』

戸外に出て見ると、近所の人たちが三四人走りまわつていました。おじいさんの手につかまつて、つと見ているうちに、その人数は急に多くなつて、提灯がとびちがいました。澄三はうろろとそれを見ながら、なぜかおじいさんを見あげることができなくて、ふるえていました。おじいさんもひどくふるえていることが澄三によくわかつていました。澄三は泣きわめきたいのをおさえて、さびしく人々のさわぐのを見つめていました。

半鐘がはげしく鳴りました。

『水だ』

澄三ははつとして、おじいさんの手をふりはなしました。それから裏口へかけこむと、わつと声をあげながら、燃えあがる火をたたいたり、屋根にあがろうとしている人たちの間へ、わりこんで行き

ました。そして合所口をおしやぶつて、バケツをとると井戸端へかけつけました。

澄三は自分がなにをしたのかむちゆうでした。

『きえた、きえた』

『そこに火がのこつてる。それを消せ』

澄三は自分が大きな手にかきのけられたので、はじめて気がつきました。

『大へんだつたな』

『もう大じようぶだ』

澄三はそういつた二人が、二郎と勝吉なのを見て、うれしく思いましたけれど、お礼をいおうにも声が出ないのです。そのうちに、おおぜいの人たちは火の消えたのを見すまして、ぼつ、ぼつとおもてへ出て行きました。火の出たのは火の氣のない、物置になつているひさしのしたからでした。

『つけ火だぜ。きつと』

『でも風がなくてよかつた』

『ほかへうつりはしまいけれどな』

『うん、はなれてるから』

そんなことを、のこつている人たちがはなしていました。

澄三はそれをきくと、頭の中がぐらぐらとにえるようになりました。そうしてひさしのしたに行つて、じつとそこをみつめました。もえたのは物置のようにかこつてある板と、それについたはめで、かべがぐずぐずにくずれて、家のなかが見とおせるのでした。そうして氣のせい、か、石油のおいがはつきり、そこに浮いていました。

『つけ火！』

それがわかつたら大へんだと思つて、澄三の頭のなかからずうんと血がさがつて行きました。そうして、ふらふらとおもてに行つて、そこに立つているおじいさんをみつめました。

おじいさんは氣がぬけたものゝように、じいつとしていたのでした。

『おじいさん！』

澄三はその手にさわりました。それはつめたくてこおつていゝようでした。そしておじいさんは、澄三を見ても笑ひもせず、ひとところをみつめていたのでした。

『おじいさん、家へはいろいろよ』

『あゝ』

おじいさんはやつとうなずきました。

隣の駐在所からかけつけた巡査が、そこに見えました。消防の人たちなどは帰りかけて、また足

をとめました。

澄三はそれを見るとき、よつとしましたが、それよりかおじいさんが化石したやうになつてうごかすのです。

『おまわりさんだ』

おじいさんはおそろしそくに身をすくめていました。

『おじいさん！』

澄三は小さい胸をふくらませました。

『え』

澄三はおじいさんの様子を見るとなにかを決心したやうにくちびるをかみしめました。それから、らはらと涙をこぼしました。おじいさんは氣がのぼせて、それに氣がつきませんでした。澄三はその手をとつて、家のなかへつれて行きながらそつとさゝやいたのでした。

『ぼくがいなくなつたら、どうかして母さんを助けてあげてね』

『えッ！』

おじいさんはびつくりして口が利けませんでした。

澄三は家にはいつてから、大急ぎでそこらを片づけました。家のなかはぐつしよりぬれていましたけれど、それでもすわるくらいのところはありました。そこへ二郎と勝吉がきて、ひそひそとさゝやきあつていましたが、すぐに澄三を手まねきしました。

『大へんなことをしたな。火をつけたのは家のものだといつてゐるぜ』

二郎がいろのを勝吉が引きとりました。

『おじいさんをつれて逃げてしまふなら、おれたちも手をかしてやるよ』

『ありがとう』

澄三はうなだれました。

『船で能登へでも行くんだな』

二郎がせわしそうにいゝましたけれど、澄三は涙ぐんだ目で二人を見あげたばかりでした。おじいさんがおどおどとそこに出てきて、青白い顔をゆがめました。

『ど、どうなつたでしょうか』

『逃げちまえ』

そういつて、いきなりおじいさんをつかまえて、肩にのせたのは勝吉でした。

『それ！』

二郎がそういつて澄三をうながしている間に、勝吉はすぐに走り出しました。

『あつ』

おじいさんは身もだえしましたけれど、勝吉は海の方へ一散に走りましました。

『ま、待つて』

二郎と一しよに澄三も走り出しました。なにかどうしろから追つてくるように、おそろしさがみんなの足をかりたてました。そうして二三丁を一息に、三人は海べの丘の下に立つてたがいにぼつと息をつきました。澄三はいつか泣いていました。おじいさんもまた勝吉のせなかで、涙をこぼしていました。

立ちどまつて勝吉は二郎を見かえりました。

『どうする？』

『逃げるんだ。どこまでも……』

二郎の言葉をとめて泣きながら、澄三はいうのでした

『ま、待つてください。おじいさんに罪はないんです。わ、わたしが火をつけたのです。わたしは警察に行きますから、おじいさん、おじいさんと病氣の母さんを……』

『な、なんだつて……そ、それはわしが……』

おじいさんがなにかいおうとするのを、澄三はとびついてやめさせました。

『いゝ、いゝの、いゝんだよ。わたしはもう行くから……』

澄三は泣きながら走り出しました。

あとからとびついて、それを引きとめたのは二郎でした。ぐつとつよく肩をつかまえると、だきよせて澄三の頬にほろほろと熱い涙をこぼしました。

『わかつてるぞ』

二郎はいいました。

『なにかもわかつてるぞ。行つてこい。おれたちはあとをひきうけるから』

よろよろとするおじいさんをたすけて、勝吉もきてつよく手をにぎつてくれました。

『澄三、わしが、わしが……』

『いゝえ』

泣いているおじいさんの腕に、澄三がすがりつきました。

『おじいさんがしたんじやない。わたし、わたしです。ですから、な、なにも、いつてはいけません』

『が』

勝吉が男泣きにわつと泣き出しました。

『な、なんてえらいやつだ……お、おれはな、泣いてるぞ。けれどおれは、おれたちはお前のことをわすれやしないぞ』

『た、たのみます』

澄三はまたかけ出しました。

『おれも行つてくる。おじいさんをおれの家へつれてつてくれ』

『いゝ、いゝよ』

勝吉のうなずくを見て二郎もいいてたまふ、澄三のあとを追つてきました。

まつくらい空でした。まだ夜はあけないで、星がまたぐいていました。二人はなにもいわないで、また家の方にかげもどつて行きました。

澄三はすぐに巡査を見つけてきました。

『す、すみません』

澄三はかけよつていいました。

『わ、わたしが火をつけたのです。逃げたのではありません。お、おじいさんを人にたのみに行つたのよ』

『……………』

巡査はだまつてうなずきました。

それは年をとつた心がけのいゝ人で、村の人たちにも信用されていきました。氣のどくそくに澄三をみつめながら、巡査はだまつて家にはいるように指をさしました。澄三はうなだれて、そのいいつけのままにしました。そして、しばらくの間、なかでしらべられると、やがて巡査と一しよに家を出て行きました。

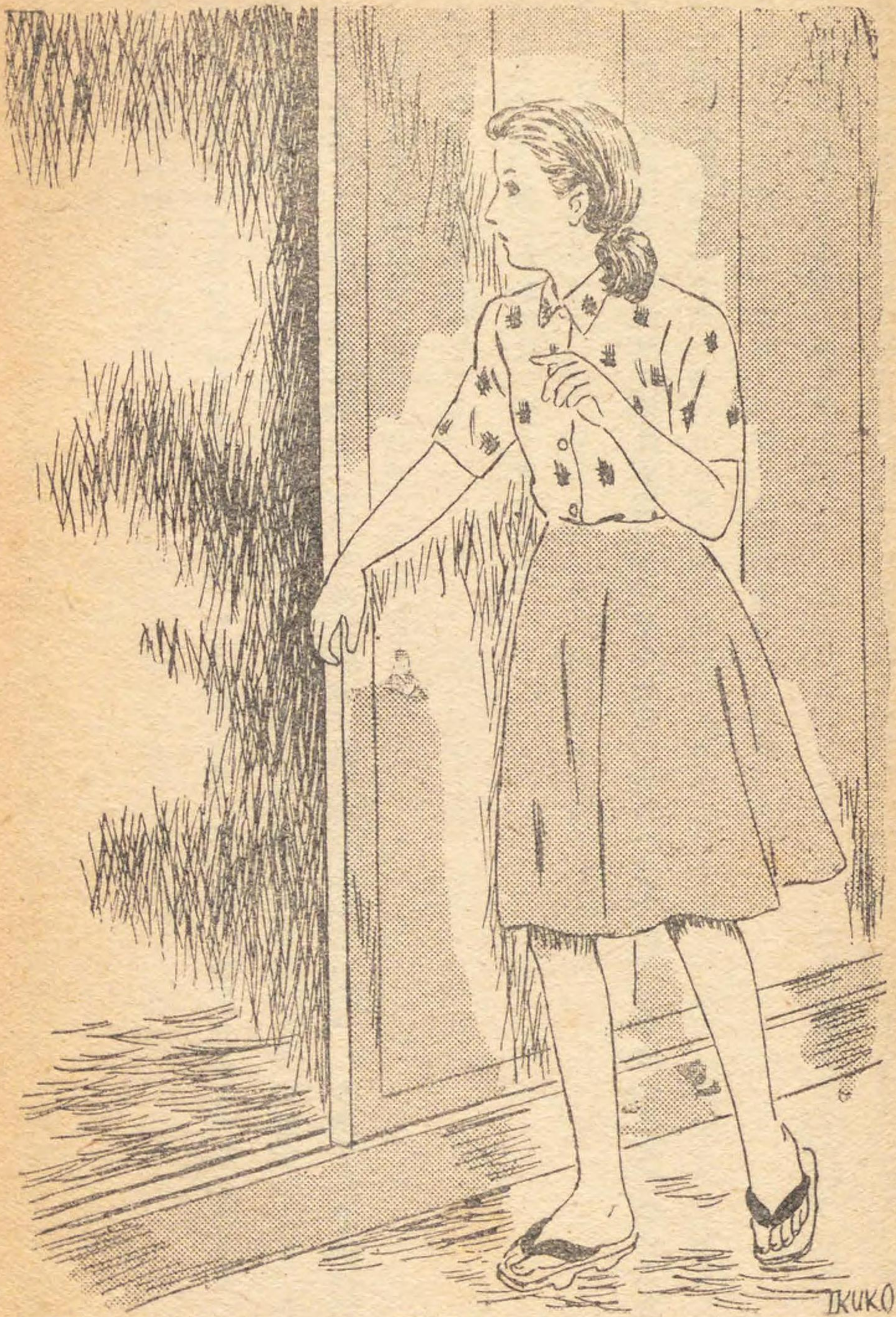
村の人たちがそこに立つていました。

『あ、出てきた』

だれかどさゝやきました。おおくの目をあびながらうなだれて行く澄三のすがたを、大きなこぶしで涙をはらいながら見送つたのは二郎でした。澄三もそれを知つて、涙の目をそれにむけました。二郎はそれにうなずいただけでした。けれどそれは、

『おじいさんのことは心配するな』

と心のうちでさけんでいたのでした。澄三の小さい心にもそれがはつきりわかりました。あけがたの、東の空が白んでくるじぶん、この小さい罪人はとぼとぼと村をはなれて行きましたが、星が一つそのとき空をかどやかに流れて消えました。



心あらば星も空で泣いていたでしょう……。

三

(あら、だれもないのかしら……)

と戸をあけて、とりちらかしたまゝ、まだびしよぬれの家のなかを、のぞきこんだ娘がいました。富山の病院から、おじいさんや澄三にあつて、みなをよるこばしてやるつもりのおよし、それがいそいそとこゝに帰つてきたのでした。母の看病で、色も白くなつている、しもぶくれのかあゝ顔、まゆをひそめながら、

『どうしたの、おじいさん』

と声をかけて、家のなかにはいつてきました。

『おじいさん』

一ども呼んだのは、その祖父だけはいるはずと思つたらしいのでしたが、すぐぶんとおつてくる焼跡やけどのにおいに気がついて、

『あつ』

と顔色かおいろをかえると、土間どまからとびあがつて、なんどをのぞきました。それからまたげたをつゝかけて、裏口うらぐちにまわると、おしつけてあつたふるい戸をおしたおして、物置もの置きの焼跡やけどをみつめました。およ

しはまつさおな頬ほから、ながれおちる涙を、ほろほろと地面ぢめんにこぼして、

『ぼ、ぼやがあつたんだわ、あつ』

とつぶやいたまゝ、ぼんやりとそのへんを見まわしていました。

ふるえる足あし、よろよるとたおれかゝるからだ、身をかべにもたせたまゝ、およしはしばらく泣きつづけました。けれど声も出ないのは、あまりびつくりしたからでした。苦勞くろうしつゞけて、母のことだけは、どうやらいゝ知らせを持つてきたのに、このありさまなのですから、

(もうだめ)

と思つたのも、むりはありません。

その母は、この四五日のうちに、きゆうによくなると、

『こゝはひとりでよいから、お前は帰つておくれ。はたらきで船主ふねぬしさんのお金かねを、一日もはやくお返しすることだよ』

とおよしをもどしてよこしたのです。

それも、その前の日に、病院びやういんへ書留かきとめの手紙が一つとゞいたからでした。

高木およしさま、とつぜん書留で、かえつておどろかれるかしれませんが、おゆるしくださ

このなかの為替は、あなたの兄さんとは仲よしの、わたしの兄と、わたしの気持ちとを一しよにした、わたしたちから、お母さんへのお見舞いです。なお、兄は心配して、

『病院は、このごろ入院料もたかいのだから、もし入用なら、そのうち高木君が帰ってから、少しずつ返してもらおうとして、そのぶんをかしてあげてもいい』

とそういつています。こんな失礼なことをこゝにかくのも、兄のなかよしであるあなたのお兄さんへの友情なのですからどうぞおいかりなく、わたくしあてにいつてよこしてくださいませ。では、末筆ながら、お母さんが一日もはやく、ご全快なさるよう祈ります。

滑川町 佐野みつ子

これが、その手紙で、なかには千五百円の為替がはいつていたのです。母は、それを見て涙をこぼしました。

『ありがたいことだ。帰つたらいちどお目にかゝつて、よくお礼をいつてね』

と母はいました。もう、はこんでさえくれれば、食事も自分でとれるように、なつていたのでした。おなかのなかに、おできがあつたのですが、ペニシリンのちゆうしやまでして、すっかりそれを

とつたのでした。お金も、父の健康保険のおかげで、半分ですむのですが、そこへ為替がとどいたので、いくらかうめあわせもできませんでした。

親切な医長さんは、為替のお金をうけとるといいました。

『石川さんの紹介だし、あとは退院するときまた少しいれて、兄さんが帰国してからどうかしたまえ。政府が、そうしたものの家族は、ぜんぶひきうけてくれるというから、とにかくいくらかはかしてくるよ。こゝでも、母さんのは、手をつくしたかいいもあつたし、なるべく安くしてあげてあるのだからね』

『は』

およしはほつとあつい吐息をはくと、あとのこと、看護婦さんなどにもよくたのんで、あくる朝母をのこしてかえつてきました。

一つすめばまた一つ、およしは、(まさか、つけ火……)

とは知らずに、そこで途方にくれています。

『おや、だれかきたわ』

しばらくして、おもてに人のきたようすなので、およしは泣顔、を手にしていた手ぬぐいでふいておもてに出て行きました。戸口に立つているのは、二つ三つ年上の女の人で、やさしくにつこりする

と、たずねました。

『たいへんでしたのね。あなた、こんなことがわかつて、いそいで帰つていらしたの』
『し、知りませんでした』

とおよしは、また涙ぐみました。

『母が、ひとりでいゝといゝますので、きょうから働くつもりで帰つてみたら、だれもいないで、ぼやかなにかおこしたようですし、わ、わたし……』

『では、おじいさまもいらつしやらないんですの』
女の人はまゆをひそめました。

『わたし、学校で生徒から話をきいて、時間にすぎがあつたので、せめておじいさまにお目にかゝろうとおもつて、ちよつときたのですけれど……』

三

およしははつとしました。

(学校)

ときいて、すぐわかつたのです。

『先生、さ、佐野先生』

とびかゝつたおよしを、その女の先生の佐野みつ子は、しつかり、抱きしめました。およしは、よいと泣きくずれて、みつ子にはなれまじとすがるのでした。少しせいの高いみつ子の手に、およしの涙が、はらはらとあつくふりそゞぎました。

『よく、すぐわたしとわかつたのね』

『わ、わからないで、わからないで』

とおよしは泣きつゞけました。

『あ、ありがたくて……母もぜひあうようにつて』

『でも、およしさん』

みつ子も、せぐりあげる涙をおさえて、やつといいました。

『あ、あなたは……』

『は、はい』

うつとりとするおよしを、せつない思いで、なお強く抱きしめて、みつ子もはらはらとあつい涙をこぼしました。

『あなたは、火事のことばかり心配するだけで、あのすなおでやさしい澄三さんが、思いせまつつ、け火をしてしまつたのを、まだ知らないのですわ』

『ま、まあっ』

とおよしが、氣をうしなわんばかりに驚くのを、みつ子は抱いたまゝ、自分もよろよろしてしまいました。

『およしさん、氣をたしかにして、わたしのいうことを、おちついてきいてくださるのよ』

みつ子は、あおざめたおよしが、

『はい、はい、先生』

としずまるのを、しばらくまつてから、やさしくいゝ出しました。

『あ、あの子は、そ、それを……、巡査に、じ、自由したつていうのよ。そして、あの子がひかれて行つたのを、見たという生徒もいましたのよ。わたし、それをきいて、

(そんなこと、うそでしょう)

といつたら、生徒ばかりでなくて、体操の先生までが、

(つけ火したのかどうか、それはわからないけれど、高木が警察につれられて行つたのはほんとうだ)

つていうの。

(罪のきまらんうちは、処分しないとしても、問題だね)

といつてゐるんです。わたし、たまらなくなつて、一時間目の授業がすむと、すぐぬけ出してき
たわ。あとはひるすきまで、あいてるんですけど、……それよりなにより、おじいさんがいらつしや
ると思つたのに、いないのがなにより心配ね。澄三さんは、きつと滑川署に行つてるんでしょうけ
れど、それよりさきに、とにかくおじいさんを見つけないでは、ならないわ』

『わたし……』

とおよしが、千々にみだれる心をおさえて、胸を抱くと、ほつほつとあつい息をつきました。それ
から、涙をふいていゝました。

『だれか、知つてるでしょうから、近所できいてみますわ』

『あなた、行けて……』

とみつ子が、氣づかうのを、およしはきつとした顔で

『大じようぶです』

とくちびるをかみしめて出て行きました。

みつ子は、そのあとで時計を見ながら、家のなかをかたづけはじめました。この若い女の先生は
よい家に生まれたためか、しつかりしていて、とにかく一部屋だけは、すわれるようにしてしまふと、
『どうしたのかしら、長いわね』

といたびもひとりごとをいうのでした。

ほんとおかしいのは、それが一時間のうえもかゝつたことで、そのうちにおよしが、勝吉とつれだつてもどつて来ました。それも、おじいさんには、あえなかつたらしくて、こまつたようにしよげていました。

勝吉が、大声でそれをなだめていました。

『なにしろ、じいさんは気がたかぶつていゝので、そこには出せねえだ』

おもてど、勝吉が、それをくり返していつていゝらしいのです。

二人は、家にはいつてきました。勝吉はみつ子を見ると、およしをふり返つて、またそれをくり返しました。

『佐野のおじようさん、ほんとにすみませんだ。わたしがじいさんをあずかつてますだけど、じいさんは氣ちがいみたいになつてゐるでしてよ。あとで、このおよしちゃんにも、よくいゝきかせてもらうですが、澄三はつけ火の罪をしよつて行きましたでさ。』

(なあとほやだよ。ぼくがしたことすりやあ、おもし罪にやあされつこないよ)

つて、そりやあしないが、それなんではあね。小さくても、あいつあ、えれえやつでさ。だから安心してくだせえまし』

とよけいなことまでつけ加えて、やるせないおよしを、なおしよげさせるのでした。みつ子は勝吉をみつめ、かあいそりなおよしの手をとつて、やさしくそれをさすつてやりました。みつ子も涙の目でしたが、およしはまぶたまで涙でそめて、苦しそりな息をついていました。

『では、わたし、帰りがけにもこゝへよりますわ。およしさん』

『は、は』

『澄三ちゃんがしたのではないことも、これでわかりましたもの。あとのことは、神さまにおすがりしましょう』

うなずくおよしを見ると、みつ子にも、

『おじいさまを、よくなだめてあげなさいね』

とはいえませんでした。そしてうなだれて、涙で見送る、およしと勝吉をそこにのこしたまゝ、学校に帰つて行きました。その心は、かあいそりなおよしと澄三のことといつばいになつて、泣き出したように沈みこんでいました。

四

のこされた勝吉は、およしがざしきのあがりはたにこしをおろしたまゝ、うなだれているのを見ていました。どうしようもなく、泣き顔をしている澄三の姉に、乱暴者の勝吉も少しよわつていまし

た。

『わかるかつたかなあ、およしちゃん。佐野のじょうさんに、みんなうちあけてしまつてよ』
『いゝえ』

およしがいゝました。

『佐野先生は、氣を悪くするような方ではないもの。たゞ、わたし、おじいさんが火を出したのならそれをおじいさんから、先生にいつてもらいたかつたわ』

『それなら、夕方までにそうしろよ』

勝吉は、一本氣の男ですから、それがすぐできると思いました。でも、およしは、おじいさんが、とても正直なのをよく知つていました。

『だめ、そんなこと。おじいさんが先生に火を出したといえるなら、いいえ、いわなくてならないとすれば、その前に死んでしまうか、警察にかけこんでしまうかだわ』

『そうかなあ』

勝吉が、こんどはしおれる番でした。

『でも、とにかく、おじいさんにあわせてください』

『そうするか』

勝吉もうなずきました。

『おれは、そんなうまいことをいうより、自分で火をつけた本人だと、警察に行きたくなつちまつたよ。めんどくさいことは、きらいだからな』

『どうだい、いつそ、そうしちまおうか』

『わたし、わたしがいゝわ』

とおよしはまだ泣き出しました。勝吉は、またこまつて、こんどはおよしを、しっかりつけました。

『めそめそすると、おれまで泣きたくならあ。泣くのをやめないと、おれ、おじいさんをのせて船を出して、どつかへかくしちまうぜ。さあ、涙をふいて出かけるよ。漁場へよつて、二郎にもちえをかりるんだ』

『はゝ』

およしも、そのいゝつけにしたがうと、あとについて、すごすごと行くのでした。勝吉にも、それを人のおらないうら道につれこむ親切はありました。そのくせ、およしがのろる歩くので、じれつたがつていらいらしていました。

が、およしは考えこんで、うなだれて行きました。

漁場によると、二郎は海へ出ていて、ゐらずでした。

『ちよつ、いないとよ。網をあげるんだ。低気圧のやつがくるんでな……。とにかく、おれびんぼうくじだが、おめえおじいさんをうまくして、警察へかけこむなんてさせるじやあねえぞ。そんなことがあると、おれも二郎も、澄三にあわす顔がねえし、まごまごすると二人とも、南の方へでもとび出しちやうからな』

言葉は荒くても、これが勝吉の義理のつよいところでした。そのやさしい心持ちは、こんな乱暴なものになるので、およしもそうしたことにはなれていました。

(そうなつたら、ほんとにどこかへ行きかねない)

と心を苦しめられるのも、これなのでした。

(いゝわ、佐野先生に相談してみるわ)

およしは、小さい胸のなかで、なにかつよい決心をしたのは、このときで、この二十にたりない少女が、くちびるをかみしめていたのは、やはり海にはたらく者の子だからでありました。

五

あくる日、少女およしの、心できめたことから、めずらしいことが、この村におこりました。その一つは、水橋中学校の英語の若い女の先生の佐野みつ子が、つとめはじめてから、はじめて早びけたことでした。それも富山に行くというので、

『おや、どうした用ですか』

となかまの男の先生がたずねると、

『病院へ、高木澄三の母を、ひきとりにまいりますので』

とはつきり申しました。

『公用にでもらつたらいゝでしょう。なにしろ問題の生徒の母のことなら……』

とその先生が、そつとおしえてくれました。すると、みつ子はにっこりして、

『いけませんわ。そんな、ゆるされないことは、自分でゆるしませんもの』

とちやんと届けをして、出ていきました。

その二つは、あと十日もいて、すつかりなおつてから退院するはずの病人が、きゆうに帰つて行つたことでした。そして、費用のお金の、まだのこつているぶんまで、すつかりはらつていつたのです。

それも、医局にお礼をいつて、そこを出るのに、わざわざ自動車まで呼んできました。

そして、

『高木のお母さん、肩にすがつて、そろり、そろり、いらつしやいね』

と廊下でみせる親切さまで、人目に立つほどでありました。



その三つは、夕方、村にその自動車^{自動車}をのりいれて、そのとまったのが、つけ火されたぼろぼろの家だつたことでした。医者の石川さんにたまにくるのも、小さい型^型のものなのに、この家にとまったのは、ぬりも新しい大型^{大型}のなものでした。

めずらしさに、子供たちのほかに、大人^{大人}まで、ゆつくり走る車のあとを、追いかけてきました。すると、だれかど、さきにおりた人を見ていきました。

『あ、中学の佐野先生だ』

それも、その佐野先生がおりと、家からおよしがとび出してきました。

『すみません、先生』

およしは、すより泣くようにいつて、頭をさげると、車の中からはい出てきたその母を、家からついで出てきた勝吉^{勝吉}が、荷物^{荷物}みたいになかにあぶつて、

『よいしょ』

と家にかつきこんでしまつたのでした。

これには、そこに見に来た人たちも、あつけにとられてしまつて、ぼかんと口をあけているしまつてました。そして、そのうちに、自動車が帰つてしまうと、やつとがやがやいゝはじめました。

『なあんだい、高木のじやあねえけ』

『さつき、じいさんが帰つたと思つたら、まただから、びつくりしたよ』

『でも、ごうせいだなあ……、澄三すみぞうがつけ火つけひまでしたのによ』

これが、うわさになつて、すぐ村にひろがりました。が、みつ子も、およしも、うわさのはじまる前に、家にはいつて、戸口をしめてしまつたので、それをきくことはできませんでした。

たゞ、その母だけが、ふとんのなかにかつきこまれて、

『おや、二郎じろうさんもきていられたのかよ』

と、きよるきよるしていました。

だまつてうなだれているおじいさん、くるしそうにうつむいている勝吉かつきち、かなづちを持つたまうら口からはいつてきた二郎、送つてきてくれたみつ子の肩かたにすがつて、およしはもう泣きすゝつていたのでした。

母は、しやんとねどこにすわつて、やつといゝました。

『ほんとに、ながくるすして、すみませんでしたです。澄三すみぞうが火をつけたとか、つけないとかのことでも、みなさまにまでお世話せわになりました、それも佐野先生が、なにかもちあけてくださったであともみなさまにおたのみして、少しでもよくおさまるよう、おねがいますでさ。およしも泣くでねえぞ。泣くと、先生さ、めいわくされるばかりだぞな』

『いゝえ』

みつ子が、それをとめました。

『泣きたいものは泣かせて、母かほさんはすぐよこにおなりなさいよ。わたしもすぐしつれいしますから』

やさしくいわれて、母もすぐよこになりました。みつ子は目をうるませて、それを見ていました。

『ではわたし、うらから帰りますよ。どうぞ、お大事だいじにね』

『でも、お茶ちやでも』

と母がいつても、かるく手をふつて、帰かえつて行くみつ子でした。

二郎じろうが、かなづちをおいて、およしにいゝました。

『うらはどうやらぶつつけといたからね。さ、勝吉かつきち、おれたちは、おもてからどう、どう、と行こうぜ』

『うん』

二人も出て行きました。

残のこつたのは、うなだれたまゝのおじいさんと、まだ泣きすゝつているおよしだけでした。母は、やわらかい目で、おじいさんを見つめていゝました。

『おじいさま、みんなわたしがわるかつたで、ふしあわせはふしあわせとして、みんなで心をあわせ』

てやるよりほかありませんでさ。そして、澄三が、一日も早く帰つてくるようにしましょうよ』

六

およしが、またすゝり泣きを高くすると、おじいさんが、はじめて声を出しました。

『およし、おめえ泣くことはねえ。泣くのは、ばかなことをしてかしたおれだ。お、おれこそ、かあいゝ孫に、火つけの罪をおつかぶせて、のめ、めといきているんだからなあ……』

おじいさんは泣くこともできないで、うめきました。そしてぼろぼろと大つぶの涙を、そこにこぼすのでした。

『うゝ、うゝ』

やせたおじいさんの胸は、苦しそくに波うちました。

それは、その母にも、泣きつゞけているおよしにも、すくいようのないものでした。それは、その母も、およしも、おじいさんが火をつけた本人だと、信じているからでした。いや、このことは、帰つたみつ子も知っているし、勝吉も、二郎も、また自白した小さい澄三にしても、おじいさんの罪をうたがう者はありませんでした。

およしは、泣きながら、だしがらの茶をすてゝ、新しいのをいれました。

『か、母ちゃん、おのみよ……これ佐野先生が、けさとどけてくださったので、自家製のいいけど、と

てもいゝのだからよ』

『は、はい、ありがとう』

その母は、わが家に帰つて、はじめて茶を、あふれてくる涙をふきながら、あじわいました。そこには、もう夕やみがせまつて、風がふきはじめていました。

『おゝしゝのう』

その母は、やつといゝました。心のなかでは、海でいなくなつた夫、シベリヤの松一、まして、いま暗い警察の留置場にいる澄三、それらの人々のことを思つていたのでした。

風は、北からきて、家をならしていました。

『先生、ほんとにいゝ方だわ、このうちの神さまよ』

およしも、風の音を、その胸のなかでしきりにならしていました。その音は、とりすがつている、涙のうれしさでした。わびしいけれど、

(のぞみをもて)

といつてくれる音なのでした。

『あゝ』

母は、ほつとため息をもらしました。

およしは、おじいさんにも、新しいお茶をあげました。そして、やさしくいゝました。

『おじいさんも、おあがりなさいよ』

『うん』

おじいさんも、さからわずにのみほしました。

『あと、つぎましようか』

『もういゝよ』

おじいさんは、からの茶碗を、目の前でまわして、考えこむのでした。

およしが見あげると、すぐ頭の上にある台所の天窓も、くらくなつて、そとは夜になつていゝのがわかりました。しいんとしたさびしい家のなか、だまつていゝと、風だけがこゝにひゞいてくるのでした。

『母ちゃん、わたしさつき船主さんところによつて、あしたから働きにくるつていつてきたわ。おかみさんはおなかを大きくしているのよ、

(そりやあ、ありがたい)

つてよろこんでいたのよ。

先生ばかりではないのね。船主さんところにも、これから恩返しよ。

二郎さんと勝吉さんとで、やけあとも片づけてくだされるし、それから、古板を持ってきて、物置から戸口までおしてくれしたので、これもみんな兄さんや澄三のおかげだし、石川さんもとときどききてくださいるつて、

(よかつた。よかつたな、母さんが……)

とよろこんでいられるんで、わたし涙がこぼれたわよ。

それではこれで、あしたはやいのだから、もうねましようよ』

とおよしはいうのでした。涙をふいて、氣ぐるしく語るむすめ、それをみつめて、母もいくたびか涙をぬぐつていました。

おじいさんも、悲しくうなずきつゞけると、やがて立ちあがりました。

『では、早くねろよ、およしもな』

そよいいながら、なごに立つのを、見送つておよしもいゝました。

『おやすみなさい、おじいさん……くよくよしないでね』

『うん』

おじいさんも、苦しい心を、その孫娘のやさしさになぐさめられて、寝に行くのでした。

やがてあかりが消えて、ねむりにつくと、くもり空をゆく、風だけがよくなつてきました。その

ひびきは、はげしくなればなるほど、つらい世を、

(つよくいきろ、つよくいきろ……)

とうたつてゐるようでした。

母だけが、澄三のことを思つて、一番おそく、ねむつたようでした。

第四章 暗い壁

ひるでも夜でも

ろろやは暗い

いつでもおにめが

窓からのぞく……。

『カチューシヤのうた』がはやつたのは、むかしみなさんが生まれる前のことでした。いまはそんな

にはげしいことはなく「ろろや」が刑務所にかわつたにしても、悪いことをした人がいられるのですから、だれもいやがるのは、おなじことです。

澄三が、村の年とつた巡査に、まずつれられていつたのは、滑川警察署で、ろわやくに少ししらべられてから、少年だといつたので、ひるまは署の人たちがやすむところにおかれたもの、その夜からその留置室にいれられていました。そこが暗くしめつぽいこと、高いまどとは、その悲しい心を、なおつよくおしつけてきました。

あくる日の夜でした。

『あしたは裁判所にまわすから、みんな正直にうちあけて、少しでも罪をかるくしておもらい、いゝかね』

といゝきかされて、夕方またそこにいれられました。小さい澄三は、しよんぼりうなだれたまゝ、

その壁に向かつて、すわつていました。

こつこつこつ、そのおまわりさんの足音のさびしさ。

『あかりを消すよ。いゝかい、その毛布をしいて、はやくおやすみ……』

『……………』

泣くこともできないで、じつとしている澄三ひとりに、やさしい目をむけると、おまわりさんも行

つてしまいました。そして、あとに残されたのは、この二日のうちに、げつそりとやせ細つた手で、胸を抱きしめている澄三でした。すぐ、ぱつと小さいあかりも消えました。

『……………』

澄三は、目をつぶりました。

思うことは、病氣の母のことでした。また海に行つたまゝ、帰つてこない父のことでした。シベリヤの兄のことでした。姉のおよしのこともありました。

(もうだめだ、なにもかも……………)

悲しさが、いつばいに心にかぶさつてくると、澄三は涙ぐみました。

ずつとおくの方で、なにを歌っているのか、歌の音がきこえました。涙が青ざめた頬をながれてきました。

澄三は、うつとりとおくのうたにきこいりながら、火事からあと少しもねなかつた二日のつかれにうとうと、ねむたくなつていました。

……………つめたい風がきました。

『あゝ』

澄三はいつか涙をこぼしつゞけて、すゝり泣きながら、眠つて行きました。わたしはいらけど、

母さんはどうしたろう。おじいさんはどうしているか。あゝ、あゝ……………世のなかはさびしいところ。わたしはこれからどうなるのだろうか。

青い空が見えました。

どこかでだれかが歌をうたっていました。

青いみ空に雲がある、

暗いみ空に星がある、

父さん母さんきてごらん、

光つているのはなにでしょう。

それはしずかなほそい声でしたが、いつか小さいときに母がうたつてくれた子守歌にかわつていました。澄三はいつの間にか、母と一しよにいたのでした。

澄三はその母にしつかりとつかまつていました。

『母さん、病氣はなおつたの』

『えー』

母はいうのでした。

『かあい、澄三や、父さんのところに行きましよう』

『え、一しよにね』

きゆうにそこはひろびろとした海になりました。二人はいつかりと手をにぎり合つて水橋の海辺の丘に立つていました。海の上には屋氣楼がはつきりと宮殿のようにかざやいていました。二人はふわふわと海のうえをわたつて行きました。

『くらいわねえ』

澄三の声がすると、すぐ海にうかんだのは、ほたるのように光る手を持つた、ほたるいかでした。それはひろい海の上を一めんにかざやかにして、月の世界のようにあかるくしてしまいました。

ほたるいか、

ちようちんつけて、

沖の父さんがしにか。

澄三はうれしくて泣いていました。

『父さんだよ』

海の上の宮殿に立つているのは、たしかにその父でした。にこにことわらつて、澄三の方に手をのばしてくれるのでした。澄三は一しよけんめいにいそぎました。けれど宮殿はにげて行くのでした。

『父さん、父さん』

いつか母もいませんでした。澄三はさびしく、海の上にたつた一人ぼっちのこされました。そしてきゆうにけむりがあがると、宮殿は赤いほのおにつままれてしまいました。

『あ』

暗い海の上でした。大きな手が一つ、そこにうかびあがつて澄三をとらえようと思いました。いつか澄三はそれに追われながら海をおよいでいました。肩にすがつている少女と少年は、助けてやつた子供とその姉でした。うゝと波が鳴りました。それは高くあがつてまた大きな手になると、一つかみに澄三のうえにぶちかゝつてきました。

『あつ、あつ、あつ』

澄三はうめきながら泣いていました。それからほつと息をすると、うつとりと夢からさめて、そこに、くらいやみと、びつしよりひや汗をかいている自分を、みつけ出しました。いちど、さめると、

しめつぽさが感じられて、もうねむれないのでした。

澄三は、しかたなくて立ちあがると、よろよろしてかべにすがりました。

(すわつてばかりいたら、これからがまだながいのに、まいつてしまう)

それが、悲しい澄三の心に、ちらつとひらめいたものでした。

(よし、生きるんだ。からだがいれば、自分は敗けるんだ)

澄三は、やみの中を歩きはじめました。それまで、なんにもものを食べなかつた澄三は、くらいなかでいくたびもよろめきながら、そこをぐるぐる歩きまわりはじめました。よかつたのは、どんなに悲しくとも、あしたからも、食べなければ……と、すぐ決心したことでした。

二

歩いてみると、澄三はまた自分が、涙をこぼしているのに気がつきました。その涙は、ふいてもふいても、あとからあとからとつとつとくのでした。

『泣くなよ、澄三』

胸のなかで、自分で自分をしかつても、涙はとめどなく、頬をながれました。澄三は、どしんどかべにつきあたりました。それは、せまい部屋のなかで、澄三の心に、おどろくように大きくひびきました。

『う』

澄三はとびのいて、またそこにすわりこみました。

『か、母ちゃんの病気が悪いんだ』

それを、壁が知らせてくれたと、そんな気がすると、やみのなかで、きゆうにおそろしくなつてきました。夢のなかの大きな手が、まだからのびてくるような気もするのです。

『か、母ちゃん』

澄三は、そう呼んで、身をすくめました。小さい声のつもりが、部屋にこもつて、大きく心をうつたからです。

それは、おそろしさを、胸のいたさにかえました。

『うゝむ』

とその苦しきで、澄三は身もだえしました。

『どうかして、どうかして』

と小さい心にさけんでその頭を壁にうちつけました。一ど、二ど、三ど、四ど……そのいたさが、頭のしんにとあつて、

『おひ』

と泣きさげんでしまいました。

『わつ』

といちど、澄三はそれつきりで、もう声をとめました。そのまゝ、澄三はやみのなかで、なおすゝり泣きをつゞけました。泣いても、わめいても、だれも来てくれないのです。このひとりぼつちがたまらぬのです。しかしやつぱり、それはたゞひとりで、こらえているよりほかに、しようもないのでした。

このひとりを知れ このひとりを

なげき悲しむ、このひとりを。

空には、ふきくる風がある、

あらしがある、自然の声がある。

これをさがそう、心に、

そして、胸に。

このひとりを知れ、このひとりを

なげき悲しむ、このひとりを。

澄三が、その苦しみのなかで、ふと気がついたのは、涙のなかで大きく風の声でした。この夜、この海べでは、夜がふけるにつれて、北風がはげしくなつてきていました。その風は、この留置場のまどのもとでも、夜にいとひびいていたのですが、そこが高いへいのうちがわになつていたのと、澄三の心が自分の悲しみばかりに氣をとられていたので、やつといまになつて、その声に氣づいたのでした。

それは、ひゆうひゆうと、海から陸にあがり、村から町へとふきまわつて、またとおく消えて行くのでした。

(あの風は、父ちゃんの出て行つた海からきて、母ちゃんのいるところでも、鳴っている)

澄三は、はつと心をうたれました。そうして、風の声に耳をすませて、じいつときゝりました。

『あゝ、風だ』

これは、澄三が、胸からしほり出して、せまいまどから、天にむかつてさげんだものでした。するとたちまち、胸のいたさが消えました。

心のおそれも、なくなりました。

身をもだえていたものも、風の声と一しよに、遠くにはこぼれて行きました。そして、なにか清らかなものが、その部屋にはいつてきました。澄三は、大きなやさしいものに身をつままれたような気がしてひれふしました。

『神さま』

としずかな祈りが、ひとりでに、口をついて出てきました。

涙は、まだあつく、いや前よりあつく、そこにこぼれ落ちましたが、天からの声が、

『泣きたいだけお泣き、泣きたいだけ……』

といつてくだすつたような気がするのです。それは、悲しいよりうれしいといつていくらいでした。

自分は、おじいさんの身がわりだ、おじいさんを、不幸せにしないでいられることは、なんてうれしいことだろうと思うと、澄三はひれふしたまゝ、なお涙をながして、そのうちにいつか、やみのなかで、ほんとは眠りこんでしまいました。ゆめもなく、やすらかな息を立て、澄三はぐつすり眠りました。……もしあかりがついていたら、そのまぶたに、眞珠のような一つぶの涙が見えて、ほんの二日のうちにやせた青白い頬に、うつすらとほおえみが浮かんでいたにちがいないのでした。ほんのり白んでから、こゝを見まわりにまわつてきたわかい巡査は、なかをのぞきこんでつぶやきました。

ました。

『つつぶしたまゝ、よく眠っている……あきらめたんだらうな』

巡査は、こつんこつんと靴音もしすかに、自分の場所にもどると、なんとなくやさしい心持ちになつていました。

三

『ゆうべ、よくねたかね』

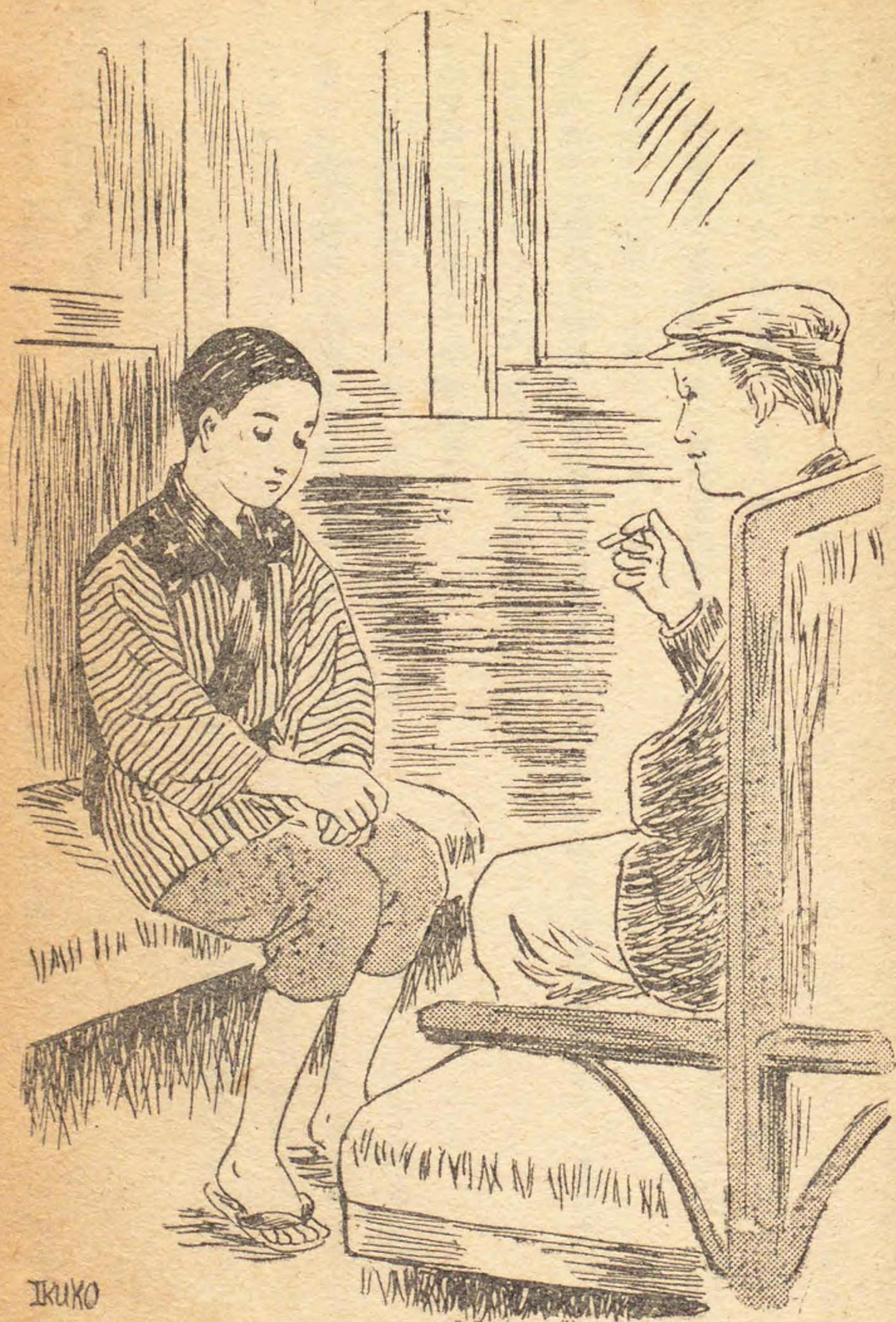
刑事さんが、そうたずねて、たばこをとり出しました。

『は』

澄三は、はつきりこたえて、うなだれました。

刑事さんは、たばこをうまさうにすいはじめました。それは、滑川駅を、富山へむけて、汽車が出たからのことでした。この朝、澄三は、その刑事さんにつれられて、裁判所の調べをうけるため、その汽車にのつたのでした。

手じょうもはめられていない澄三を、私服の少年係りの刑事さんは、すいている腰かけを見つけて、自分の前にすわらせてくれました。それは、よそから見ても、父と子が、どこかへ用で出かけてゆく……、そんな様子にしか、見えないにちがいません。たどちがつているのは、澄三が悲しそ



IKUKO

にしょげかえつてゐることでした。

刑事さんは、またにこにこしてたすねました。

『けさ、差入があつたね』

『は』

『あれ、よく食べたようだね。おいしかつたかい』

『え』

『は、ずつとたべなかつたのだから、むりはないよ』

『……………』

『でも、あの差入れをしたのは、佐野つて、町の醤油造りのまるサの主人の名だが、どうして知つて
るんだい』

『シベリヤへ行つてゐる、兄さんの仲よし……………と思います』

『そうか』

刑事さんは、いつていゝかわるいかと、ただうなずいたきりでしたが、外をながめると、きつと澄
三をみつめ返して、はつきりいゝました。

『いゝかね、きみは、つけ火をしたにしろ、あとけつして悪いことしないと思うから、あじさんにな

つたつもりで、これをいつてあげよう。差入屋にゆうべきたのは、先生らしい若い女の人だそうで、佐野さんの妹なのを、差入屋も知つてるといふよ』

『あつ、佐野先生……』

澄三は、びつくりすると目をみはりました。みるみるうちに、その目に涙が浮かんできました。

『知つてるのかい、その人を』

『は、はい、が、学校の英語の先生です』

『なんといい人だね』

『さ、佐野みつ子先生……、平がなで』

『さ、もうよし……そして、涙をふきたまえ』

刑事さんは、手帳を出すと、それをさらさらとしるして、すっかりだまりこんでしまいました。

『……』

そして、汽車は、なお走りつづけました。

澄三は、差入れという言葉や、差入屋というのが、留置室などの犯人に、食べものはこんでくれることなど、はじめて知つたのでした。それも、けさのおべんとうが、警察のでなくて、佐野先生がわざわざさしいれてくれたということが、心のなかに、雷のようになりひびいていました。胸をう

たれたので、それがしずまつてきても、そのときめきはいつまでも心にのこつて、胸さわぎをつづけているのでした。

『あゝ』

澄三は、涙をいくどとなくふくと、なにかなし心の底からわきおこつてくる力を、胸にいつばいにして、まどからくる風にふかれていました。

うなだれたまゝでも、心はたかぶつていたのでした。

『……』

刑事さんが、それをみつめました。

『きみ、だれかどなにかすると、それがよいことでも……、もちろん、悪いことならなあだが、それが世のなかに関係して、いろいろな人が、せわしい間をさかなければならんだ。少しむずかしいかしないけれど、そのおゝぜいに用をさせたり、めいわくをかけたりのを、なるべくすくなくするようになるのが、人間の勤めなのだ。きみも、これから、警察や裁判所などに、手かすをかけない者になるようにしたまえ。わかつたかね、このことが……』

『は、はい』

澄三はうなずきました。

『二どとなんか、こんなことをするものですか、こんなことを……』

といふたいたいのですが、胸がいつばいで、舌もふさがつてしまうのでした。そのうちに、刑事さんがいきました。

『さあ、もう富山につくよ』

『は』

『なるべく一しよに歩いて、ぼくとはなれないようにな』

『……』

澄三は、刑事さんにしたがつて、列車からホームにおりました。風はよわくなつていたものゝ、その日も空がくもつて、そろそろ人が出て行くと、かるいほこりが立ちました。

『行つたら、なにもかも正直にいって、はやく許されるようにするんだね』

『は』

刑事さんにひかされると、澄三はうなだれて、そこから出て行きました。せめて知つている人のないのが、悲しい澄三をなぐさめましたが、それでも、

(母ちゃんのいる病院は、どつちの方だろう)

と思うと、いつか心がしずんでくるのでした。

四

ちようど、その時分でした。富山裁判所の検事室の、いろ／＼な調べ書をのせてある、大きなテールブルに向かつて、朝から調べものをして、ひげのこい紳士がありました。これが悪人におそれられている、永井検事なのでした。

うわさによると、この検事さんは、

『悪人にはこわいが、善人にはやさしくていゝ人……』

といわれていました。

その検事さんが、いままゆをひそめているのを見ると、これはきつと、どこかにわるい人間がいて、またわるいことをしたのちがいありません。

そこへ電話がかゝつてきました。

『しげよ、はいはい、ぼくだ……。うちからかけてるんだね。はい、はい、ぼくは少しせわしいが、なにつ、敦賀から電報、なに、清二からだつて……。じやあ、ゆうべはいつた船で、清二が帰還したんだね……。そうか、もしもし、もしもし、ぼくはひるめしに、うちに帰るよ、うん、うん、そのとき、そうだんするから。水橋にだけ、すぐ電話しておけよ。うん、はい、はい、なるべく早く帰るよ』

永井検事は、これで電話をきりました。

そのくせにここにこして、しばらくは、しらべものも忘れていました。

(やつと、四年目に弟の帰還だ。からだがわるいとかいつていたから、だめだと思つて、あきらめたこともあつたのに……。母さんも、こおどりしていられるだろう』

でも、検事さんは、やつと調書を取りあげました。

『さて、この少年放火事件は、少年審判所にまわせばいいが、けさつれてくるというし、……こういふことは、本人の自白だけで、いゝともいえないのだからな』

検事さんは、そうひとりごとをいつて、ゆうべとどいた、水橋の放火少年のことを、熱心に、読みはじめました。

それを、やつと読みおわつたときでした。

とんとんとドアがたたくかれました。検事さんは、顔をあげていいました。

『おはいり』

汽車で、澄三をつれてきた刑事が、そこに本人をさきに立て、はいつてきて、ていねいたれいをしました。

『滑川署の少年係りでございますが、放火犯をおくつてまいりましたので、おひきとりねがいま

す。

きみ、このかたが検事さんだ。おじぎをしたまえ』

『は、はい』

澄三は、よろめいて、ふるえながらおじぎをしました。やはり検事さんがこわいのでした。そして、そのひょうしに、ポケットから、赤い墓口をおとすと、あわててそれをひろつて、もとのポケットにおしこみました。ひもだけが、まだだらりとたれていましたけれど、澄三は気がつきませんでした。

検事さんは、その様子を、一つものこさず見ていましたが、なんにもいわずに、刑事から送り状をうけとつて、それをしらべました。

『来たまえ、書記室で印をおさせますから』

『は、はい』

刑事は、検事さんについて、となりの部屋にはいると、あけたまゝのドアをふりかえつて、そつとさゝました。

『いゝんでしうか、あの犯人をあのみで』

『犯人、犯人で……いけませんぞ、きみ』

と検事さんはいうと、澄三まできこえる声で、刑事をたしなめました。

『あの少年は、たゞけんぎ者です。そのつもりで、あつかつてくださつたでしょうね』
『でも、いまも、わたくしたちにかくしていたものを、落したのですから、盗癖があるかもしれませ
ん』

『そうでしょうな』

検事さんは、やりこめたと思つている刑事を、平気でみつめました。そして、刑事と一しよに、す
ぐ検事室にもどりました。そのまゝ澄三のそばに行くと、そのポケットから、ずるりとひもを持つて
赤い墓口をひき出したのでした。

『あつ』

澄三はびつくりして、とられまいとしましたけれど、それはまにあいませんでした。

『君、ね……、ぼく、ちよつと用があるし、この墓口のこと、たしかめたいこともできたので、君
もその間に、おひるでもすまして、ぼくにいうことを、考えておくがいいよ。ほかのことでもそうだ
がうそはぼくの前では通らないからね。では、刑事さん、この人はひきとりましたから、安心して帰
つてください。ごくろうさまでした』

検事さんはそういつて、そこに看視人をよびました。

澄三は、そのうちに検事さんを思い出しました。それは、墓口となかのお金をもらつた日に、水橋

の医者いしやの石川さんについた小がたの自動車からおりた紳士しんしで、あくる日、海でたすけた邦雄くにおや、その
姉あねをつれて、富山とよまに帰つた人ひとにちがいありません。

が、澄三すみさが、邦雄くにおやその姉あねが、よい父を持つていることを、うらやんだことを思い出しているあい
だに、検事さんはさつさと帰つてしまつて、自分は看視人かんしじんにつれられて、うすぐらい裁判所さいはんじょの留置室りゆうちしつ
に行かねばなりませんでした。

看視人かんしじんは、澄三すみさがしおれているのを見ると、なぐさめるようにいつてくれました。

『しんぼろしな。この部屋へやでも、お前ひとりだけにするので、ほかのものをべつの部屋へやに、うつした
りしたのだからな。ひるめしだけは、あとでわたしたちの部屋へやでつかわせてあげるよ』

『は、は』

澄三すみさは、うなだれてそこにすわりました。そこは、滑川署なめりかわしよのよりせまくて、むつとなにかの臭においが
たまらなく鼻はなをついてくるところでした。そして高い窓まどのそとは、木がしげつて空そらも見えず、壁かべがぐ
るりととりまいて、看視人かんしじんががちやりとかぎをかけた音が、いつまでも澄三すみさの心にのこつていまし
た。

五

すわつてみると、澄三すみさはおじいさんのことが、心配しんぱいでたまらなくなりました。

(もし、自分の罪がうそとわかつたら、あの年とつたおじいさんが、こんなところにいられるのではないか)

それを思うと、澄三はたまらなくなりました。

赤い墓口のことは、澄三はあまり心配しませんでした。邦雄とその姉が、海のことなどを父にうちあけるはずはない、と思うと、海でひろつたと、いゝ通すつもりでした。それを正直にいつて、邦雄などをしからせるようでは、そのなかのお金をたすけられたのを、忘れるのと同じだと、小さい心できめて、

(返えそうと、だいじにしていたのに)

と思うのでした。

今朝は、早くやつてきたので、お晝までに、時間がすいぶんありました。そして、心配はまた、おじいさんと、母さんのことになるのでした。

足音がしました。がちやりとかぎがはずされて、看護人があらわれました。

『差入れがあるはずで、そのうち晝べんとうだ』

『……………』

『こののはひどいから、田舎でくらししたものにもたべられない。もう少しがまんしな』

老人は、いゝつゞけました。

『差入れにきたむすめがな、面会したいといつたけれど、それは検事さんの許しがなくては、いけんことになつてゐる。それで……………』

(また、佐野先生がいらしてくれただのか)

澄三は悲しく目をふせて、青白くやつれた顔に、せつなそうなありがたさをあらわしました。が、それは、すぐ、まぢがつてゐると、わかりました。

『そのむすめさんが、(弟に、ほんのひとことだけでいゝから、ぜひつたえてくれ)つていうから、いま検事さんに電話でうかゞつたら……………いゝかたじやあないか、

(早くいつて、あんしんさせてやれ)

つてよ。それは、おめえの母やんが、きのう病院から帰つてきて、うちで養生しはじめたから、安心しろつてことだよ』

『あつ』

それは、胸のつかえが、一つおりのような叫びでした。

『はゝゝ、いゝたよりがきてよかつたな。そのうちむすめさんにもすぐあえるよ。あのむすめ、姉さんだな、よく似ているもの……………ほれ、紙だ。これも差入れたよ。手ぬぐいと、ようじとはみがきは、

あずかつてあるからな』

『は、は』

そこにまた足音がしました。

『おや、べんとう、こつちへ持つてきたのかい。おいで、あつちに、食^たべるところがあるから……』

『そうか、それもいゝな。あとでかたづけ^づけるから、すんだら、すみにおいておきな』
『は』

かけた湯^ゆ呑^のに湯^ゆが一ぱい、はげちよろなはこべんとう、がちやりとドアにかぎがかゝると、床^{とこ}にのこつているのは、それきりでした。澄^{すみ}三^{ぞう}はしばらく、それをみつめていました。うす暗^{くら}くとも、目が、それになれてきていました。

きゆうに、澄^{すみ}三^{ぞう}は、それを目の前にひきよせて、手をあわせました。

『姉^{あね}さん、ありがとう、いたゞきます』

澄^{すみ}三^{ぞう}は、涙^{なみだ}をおべんとうにしたくらせて、それを食べたのでした。

みつ子^{みつこ}につゞいておよし、二人^{ふたり}がそこにいなくとも、朝^{あさ}とひる、二人^{ふたり}がつゞいてきてくれたも、おなじことでした。

(父^{ちち}ちゃんがいなくなつても、ぼくには先生^{せんせい}や姉^{あね}ちゃんや、おゝぜいついている。母^{はは}ちゃんも、もういゝんだ)

と思うと、そのしめつぽさにもおいても、氣^きになりませんでした。そして、体^{てい}じゆうに力がわいてきました。食^たべているごはんの一つおすつ、おかすの一つすつにも、なつかしい姉^{あね}のおよしの思いがこもつていることがわかりました。

『ごちそうさま、姉^{あね}ちゃん』

澄^{すみ}三^{ぞう}は、おべんとうを少しも残^{のこ}さずたべました。そして、それをきちんと、入口^{いりぐち}近くにかたづけ(どうしても、おじいさんを、こんなところに、こさせるもんか)

と壁^{かべ}をにらんでいました。

やがて、また足音がして、看^{かん}視^しの老人^{らうじん}がきました。

『検^{けん}事^じさまが呼^よんでいらつしやるから、おいで』

『は』

澄^{すみ}三^{ぞう}が検^{けん}事^じ室^{しつ}に行く^いくと、永^{なが}井^い検^{けん}事^じは、すぐ前に、この放^{はな}火^か少^{せう}年^{ねん}をすわらせて、じつとみつめまし^た。もう、その廣^{ひろ}い部^ぶ屋^やに二人^{ふたり}つきりで、そこはしいんとしずかでした。

検^{けん}事^じさんが、やさしくいゝました。

『君ふるえてるね。うそさえつかなければ、ぼくをこわがることはないよ』
『は、は』

『ほら、まだふるえている。君は、まだ、ぼくにかくしていることが、あるにちがいない。どうだね
火事は、石油をぼろにしましたのから出たらしいが、その石油はうちにあつたにしろ、ぼろをしめし
たのは、火をつけたときかね。それとも、前からしたくしておいたのかね』
『前から、したくしておいたんです』

『ふうむ』

検事さんは、じつと澄三の目を、のぞきこみました。

『すると、君は、前のぼん、おそく漁場から帰つて、よくそんなしたくをするひまがあつたね。ほら
こゝに（おそく帰つた）と書いてある。これは、君がいつたとおりを、滑川からまわしてよこしたも
のだ』

『いゝかね。その前のぼんは、おじいさんも、ひとりです番をしていたのだから、きみが、そんな
ことをしているのをみつけたら、すぐとがめるだろうし、こゝにうそがありはしないかね』

六

押しつめられて、澄三はすぐ青ざめると、またふるえ出しました。でも、おじいさんのために、こ

ゝではどうしても、うそをおし通さなくてはならないと思ひました。

『そ、その……そのしたくは、おじいさんが、納戸で寝てしまつてから、そつとやつたんです』

『は、は、は』

検事さんは、笑い出しました。

『これは、家をやけば保険金がとれる。そのお金で、母さんの病院の費用をはらいたい。それが、火
をつけるもとなんだが、君は、その保険のことをよく知つていたね。それに、君が、保険のこゝを知
つてたにしろ、そんな目的で、自宅に放火して焼いても、保険屋さんは、保険金を一文もはらつてく
れないんだ。これを知つていいのかね』

『えッ、ほ、ほんとですか』

澄三はびつくりして、へびににらまれたかえるのように、身をすくめました。

『では、このことは、君にもうそがあるらしいから、あしたの朝まで、もいちどよく考えて、こんど
こそ、うそのない眞実をうちあげたまえ。どんなことをしても、いゝのがれすればいゝ、そう考えて
も、なかなかそれはとおらない。どこかであらわれてしまうのだ。それをよく考えて、あとは、あし
たにしよう』

『は、は』

澄三は、ほつと、大きなため息をつきました。

(これで、まずすんだ)

と、安心したからですが、検事さんはこれを見ると、いきなりポケットから赤い蒸口をとり出して澄三にさしつけました。

『さ、これは、君にかえすから、とりたまえ。かくしておいたのはいけないがね』

『……………』

澄三は、それをうけとらずに、おそろおそろ検事さんを見あげました。

『ぼくが、ひろつたのでも、とつたのでもないことが、わかつたのでしょうか？』

『水橋に行つたとき、あの海で、きみともだちになつた、姉の方が、君にあげたことはわかつたよ。君が、こゝにきていることは、まだ知らないから、

(どうして、父さんが持つているの)つて、ふしぎがつていたがね』

『……………』

ためらつたあとで、澄三はこれをうけとりました。

(返えしたい)

と思うのですが、それをいゝ出せば、またといつめられて、邦雄がとよにはまつたことを、うちあ

けねばならなくなると思つたからでした。

澄三は、留置室に帰つてきて、またそこにすわりました。このまゝ、あしたも通せればおじいさんをこんなところに、こさせないですむと思つたのです。

(いやだなあ、正直にいえないうち)

と苦しくてたまらないので、胸を抱きしめて、壁をみつめてみると、そのうちにやつと夕方になつてきました。そして、足音もなく、ドアのかぎがちやんとなつて、箱べんとうの夕はんがとどきました。あまりはやいので、澄三がびつくりしていると、小使さんが、のぞきこみました。

『また差入れだあ。夕食から名ふだづけにしたよ。いれものはあした取りにくるからね』

小使さんは、そういゝすてゝ、もどつてしまいました。

澄三はすぐ名ふだを見ました。

『山田勝吉の』

それには、そう書いてありました。

『……………』

澄三は、身をすくめました。勝吉がそこらにいて、

『やれつ、やりとあせ』

といつて、自分をばげましてくるような気がしたからでした。けれど、それも、ほんとをいえばうそをつきとおせと、そういうことになるのでした。

『さ、いやだなあ』

澄三は、自分で自分にそういつて、あたりを見まわしました。それをだれかど、きいていはしまいかと思つたからです。見まわすと、夕やみのせまつたそこは、うす暗いというよりも、もう夜でした。そして、そのとき、ぼつとあたりがつきました。澄三はぎよつとしました。時間がきたにらがないのですが、やはりぶるつとふるえて、心をおのゝかせていました。

『あゝ』

澄三は、じつと名ふだをみつめました。

(やるんだ、どんなにいやでも、おじいさんのために、うそをつき通すんだ)

澄三は、すぐに夕はんをとりました。そして、わきにつんである毛布をしくと、それにつままれてごろりとよこになりました。ねるよりほかにない夜の長さ、つめたいかべがたかだかと、ひとりの自分をかこんでいるのです。

とろとろ眠りかけると、夢に大きな手があらわれてきました。そしてそれにさまされると、目はかべを見るのでした。滑川署での安らかな心持ちが、こゝでまたみだれてきました。澄三は、その苦し

みをこらえて、やつとあけがた近くになつて、悲しい眠りにはいつたのです。

第五章 罪をめぐる人々

『永井さん、永井さん』

そこは、富山第二中学校の門前でした。呼ばれた女生徒は、につこりしてふりかえりました。

『なあに、平田さん……わたし、きょうは、なにか家に、いゝことがあるような気がして、さきに出たの、ごめんなさいね』

『あゝら、あなた、母さんのお乳がこいしいの、いやだわ』

『ほゝゝ……、それは、あなたの方よ』

『あれ、どうして』

『どうしてつて、ちゃんとわかるわ』

『ちゃんとわかるんですつて、おかしいわね。わたし、母さんよりか、きょうは、おねだりしていた

本が、とどいていさかと思つているのに……』

『でも、顔に書いてあるわ』

『えッ、ほんと……』

追いかけてきたお友だちが、あわてゝ、顔をふいたので、永井といわれた子が笑いました。

『うそよ、そんなこと……でも、その本「母恋乙女」というでしょ』

『あら、どうして、それわかつて』

『わかるわ』

『おかしいわね、ほんとに顔に書いてあるはずはなし……』

『ほゝゝ、このあいだ、注文したつて、あなたが、自分でいつたじやあないの』

『まあ、するいわ……、やつぱり永井さん、検事さんの子ね』

仲よしの二人のうれしい学校帰りなのでした。いそいでいるといつているのに、あわてるどころか
ならんでゆつくりと歩くのでした。やがて町かどで別れると、永井と呼ばれた子は、やしき町にはい
つて、自分の家につきました。

『たゞいま』

声をきくと、かけ出してきた小学生がいました。

『姉さん、おやつはおいもだけど、きんときだからうまいよ。ぼくに一本わけてくれるなら、とても
いゝはなしと、も一つふしぎなはなしを、きかせてやるけどなあ』

『いゝはなしつて、なあに邦雄さん』

邦雄……、水橋の海で、とよにはまつた少年の邦雄です。邦雄は今その姉をむかえたのですが、す
ぐその母も出てきました。

『お帰り……、シベリヤのおじさんが、教習まで帰つてこられてね、電報をうつてよこされたよ』

『まあ、よかつた……』

すきなおじさんの帰かんときいて、その姉はとび立つようでした。

『おばあさま、大よろこびで、いまお迎えのおしたく……』

『父さんは』

『お晝にいちどお帰りになつて、またお役所ですよ』

『それから……』

邦雄が、よけいなおしやべりをしました。

『水橋のおじいさんにも、母さんが電話で知らせたとさ。ぼく、きようはおひる帰りだから、なんでも知つてるんだ』

『で、おじさん、いつ富山にお帰りになるの、母さま』

『あしたの朝つて、電報にあつたのよ。敦賀の引揚所にとめられて、汽車もきまつているのよ、その汽車にしかのれないのよ。』

『では、わたし……、学校から帰つてくれないと、お目にかゝれないわ』

『引揚者の家族は、学校がおやすみになるはずよ。父さんも、あしたはおひる前は、おやすみにして、おひるからおつとめに出るつて、おつしやつていましたよ』

『まあ、うれしい……』

姉は、いそいそとして、奥のおばあさまにあいさつに行きました。

やがて、姉が、姉第二人の勉強部屋にはいつてきました。手には、おやつのお皿を持っていました。

『さ、邦雄さん、これは……、いゝおはなしでなくて、ふしぎなおはなしのほうのぶんよ』

姉は、にこにこして、一ばん大きいのを一つ、邦雄にわけてくれました。

『そ、それはね』

邦雄は、おやつをたべながら、姉をみつめました。

『あの、そら……夏休みのとき、水橋の子にやつた、姉さんの赤い墓口をね、おひるに、父さんが、』

ひよつこり見せて、

(姉さんが、おとしたなんてうそだろ。だれかに、やつたのじやあないか)

つて、こわい顔をしたんだもの……』

『まあ……、それで、邦雄ちゃん、なんていつたの』

『だから、だからぼく、なかよしになつた水橋の子が、ほしそに見ていたので、やつちやつたので、ぼくもその子に本を二さつやりました、つていつただけど……、それいけなかつた？ 姉さん、いけなければ、ぼくあやまるよ』

『父さん、それだけで、あとはきかなかつたのね』

『うん』

邦雄は、うなずきました。

『……けれど、あとでまた姉さんにきくかもしれないから、ぼく少し心配しているんだけど……。あれどこから、父さん、持つてきたのか、知りたいんだよ』

『すつかりほんとうのこといつてしまうと、よかつたんだわ、あやまつて……』

その姉は、まゆをひそめて、考えこんでいました。それからやつといいました。

『とにかく、うちのなかがごたごたしているから、こまるわね』

一人はそのじぶんにも、澄三が父にしらべられて、とぼとぼと再びあのうすぐらい留置室にもどつたことなどなんにも知りようがありません。

二

おなじ日の夕がた、富山から帰つた勝吉は、東水橋口駅にありて、澄三の家をたずねようと、田のふちの小道にまかりました。いらいらしている勝吉は、立ちどまると、まきたばこに火をつけました。(あの検事、面会もゆるしてくれやあがらねえ)これが、氣短かな勝吉のおこつていたねでした。

たばこをすつても、うまくないのは、このせいで、勝吉は小橋までくると、ぼいとすいかけをすてました。そのとき、こじきのひろ吉とすれちがいました。ばかのひろ吉は、すてたまきたばこが、まだけむりを出しているのを見ると、うれしそうにそれをひろいました。そしてうまそうにすいながらあるき出すと、二三ぶくしてから、とまつてあたりを見まわしました。

『うふふ』

また一ぶくして、にやにやしたのは、勝吉もすたすた行つてしまふし、だれも見ているものがないからかもしれない。ひろ吉は、たばこの火を、ゆびさきでもみけすと、残りを大事そうにふところにしまいました。そしてまたのろのろと、人通りのない道を、歩き出しました。

勝吉は、せかせかあるくと、やがて村はずれの澄三の家にきました。おもて足をとめたのは、なかどあまりにしいんとしずかだつたからです。

『……………』

勝吉はだまつて、裏にまわりました。そして、そこでおじいさんが、悲しそうにうなだれて、こみを燃しているのをみつめました。

『母やん、寝ているようだね。そうだろう……、おじいさん』

『……………』

おじいさんは、うなずいて、こみの火をつきました。

『寝ているのは、いゝことだ』

勝吉が、立つたまゝでいゝました。

『寝る子はそだつ、そういうからね。あの母やんも、ずんずん直るから寝るだね。およしちゃんも、はたらきに出て行つたんだね。朝のうち富山へ行つて、帰つて働くなりたいへんだが、これも澄三のためだからだよ』

澄三の名をきくと、おじいさんは苦しそうに身をふるわせました。

『う、う、あ、あつてきてくれたかい』

『およしちゃんは……』

『だ、だめだったよ。調のすむまではつて……』

『おれもおなじなのさ。』

(ものもよく食^たべるし、よく寝るらしいから、安心しろ)

つて、へんなじいさんが、じろじろおれを見ていやがるんさ。そして、おれをどういう関係かときくから、(はたらきなはまだ) つてどなつてやつたけど、いまいましいなあ検事のやつだ。おくさんはこの石川さんのむすめだつていうのによ』

まだいきり立つ勝吉を、おじいさんがだめて、涙をこぼしました。

『まあ、いろいろ規則もあるだろうし、おこらねえでくださいよ。……わしがあさはかで、みんなに心配かけたり、澄三につらい目をさせるで、わしこそ調べられて、あらいざらいいつてしめえてえでさ。あゝ、勝吉つあん、あんた、わしをうつたえさせて、この苦しみを、やめさせてくれるよ。それでなければ、いつそ、いつそ、し、死なしてくださいよ』

だまつてきいていた勝吉が、たまらなくなつて、おじいさんをしかりつけました。

『な、なにやういふんだい』

『……………』

『おめえがうつたえるんなら、澄三も、おれたちも、こんな苦勞することをあねえんだ。そ、それを、死にてえなんて……』

勝吉も、涙でまぶたをぬらしていました。

『いまは、どんなに苦しくても、石にかじりついても、おじいがしんぼうしなけりやあ、澄三の苦しみもむだになるんだ。しつかりしてくれろよ、しつかりしてよ』

『うゝ』

おじいさんも、うめきながら、ひいつと泣きたいのを、くちびるをかみしめてうなだれました。ごみの火をつくと、なから出るマッチのえさを、一つずつひろつて火にくべるのでした。

勝吉は、それを見おろしながら、自分もこぶしで涙をはらうと、ほいとふりかえりました。

『じゃ、そのつもりでな』

勝吉は、そういって、そこを立ちさつて行くのでした。

『……………』

おじいさんは見送りもせず、うなだれて涙をこぼしながら、もえさしのマッチを一本ずつひろつて、火に投げこんでいました。その火のくすぶる煙りが、もやもやと、夕がたの空にひろがるのでした。

(澄三め、マッチをずいぶんつかつたものだ。こんなにつかわずとも、石油をしめしたほらなら、一本か二本でつくのに)

けむりの下で、おじいさんはそう思つて、マッチのじく木を燃やしていました。

おじいさんは、火をつけたのではありません。澄三が、自分のほらに石油をしめしているところをみつけ出して、自分のかわりに物置のほらに火をつけた、そう思いこんでいるのです。

(わしのかわりに、おそろしい罪人になつて、わしに罪を犯させないようにしたのだ。もし、あれがつけ火しなかつたら、わしがそれをするところだつたもの……、このまゝではあれにすまない。あれはまだ小さくて、さきがある。わしは年をとつていて、手もろくにきかないのだ。わしが火つけをしたことにして、うつたえ出れば、澄三がゆるされるのだ。さきのあるあれをゆるしてもらふことならわしのうそも、神さまやあれのおやじは、きつと許してくれるにちがいない。

勝吉さんや二郎さんや、佐野先生や、澄三の母やんからおよしまで、わしが火をつけたと思つてゐるのだ。そして、かえつて澄三がわしの身がわりになつたと思つて、それをおさせようとしてゐるのだ。

わしが、

『自分でつけました』

とうつたえ出れば、それをほんとにしてくれるから、なおよいのだ。これは、どうしても、澄三を火つけの犯人にしないで、わしが犯人になるのが、ほんとだ)

これが、うなだれて、ごみやきをつぶけている、おじいさんの考えでした。

秋の日は、早く暮れて来ました。

(こんやこそ、村の駐在所に行くことにしよう。みんなに悪かろうと、しかたがねえのだ)

おじいさんはくちびるをかみしめて、そう決心しました。そして、たき火に水をかけると、家にはいりました。母に夕方の食事をさせて、自分もすませるとそれをかたづけしてから、だまつて母の寝入るのを待ちました。

母がいきました。

『さつき、勝吉つあんが来たようだつたけれど、やつぱり会えなかつたようね』

『うん』

母は、やはりおじいさんに対してゆだんしないようにしていました。そしてこんなことをいつたです。でもおじいさんは、めんどろそうにうなずいたきりでした。

『おじいさんは、もうねなさいな』

母は、ふきげんなおじいさんにいきました。

『わたし、ひるまうつらうつらしたので、ちつとも眠くありません。およしの帰るのを待つているから、わたしのことは、かまわないうでくださいよ』

『じゃ、そうするか』

おじいさんは、しぶしぶなどにはいりました。少しでも、うたがわれないようにするのは、さきにねたふりをするよりほかありません。

(よし、そのあいだに、書置きだけしておこう)

おじいさんは、長いあいだ字を書くこともわすれていたので、火ばちから消しずみをさがし出すと、ありあわせの古紙をかさかさいわせてやつと書き出しました。母がすぐそれをとがめました。

『おじいさん、まだおきているんです』

『うん、一ぶくしてえだよ』

『そうなの……、わたしネズミかと思つたのに』

『……………』

おじいさんは、こんどは紙の音を立てないように、とにかく書きつづけて、金釘のようなかたかなを書きならべました。

カキオキ オレヒツケシタジシニイタカラナ サヨナラ

これを四つにあつて、やつとあかりを消すと、おじいさんはねどこにもぐりこみました。

ねどこにもぐりこんだおじいさんは、暗やみのなかで、大きく目をあけたまゝ待つていました。およしはなかなか帰つて来ません。気がたかぶつていても、おじいさんには、いつもすぐねるくせがついていました。それで、おじいさんは、いつかうとうとしはじめました。そして、そのうちに、ほんとはぐつすり眠つてしまいました。

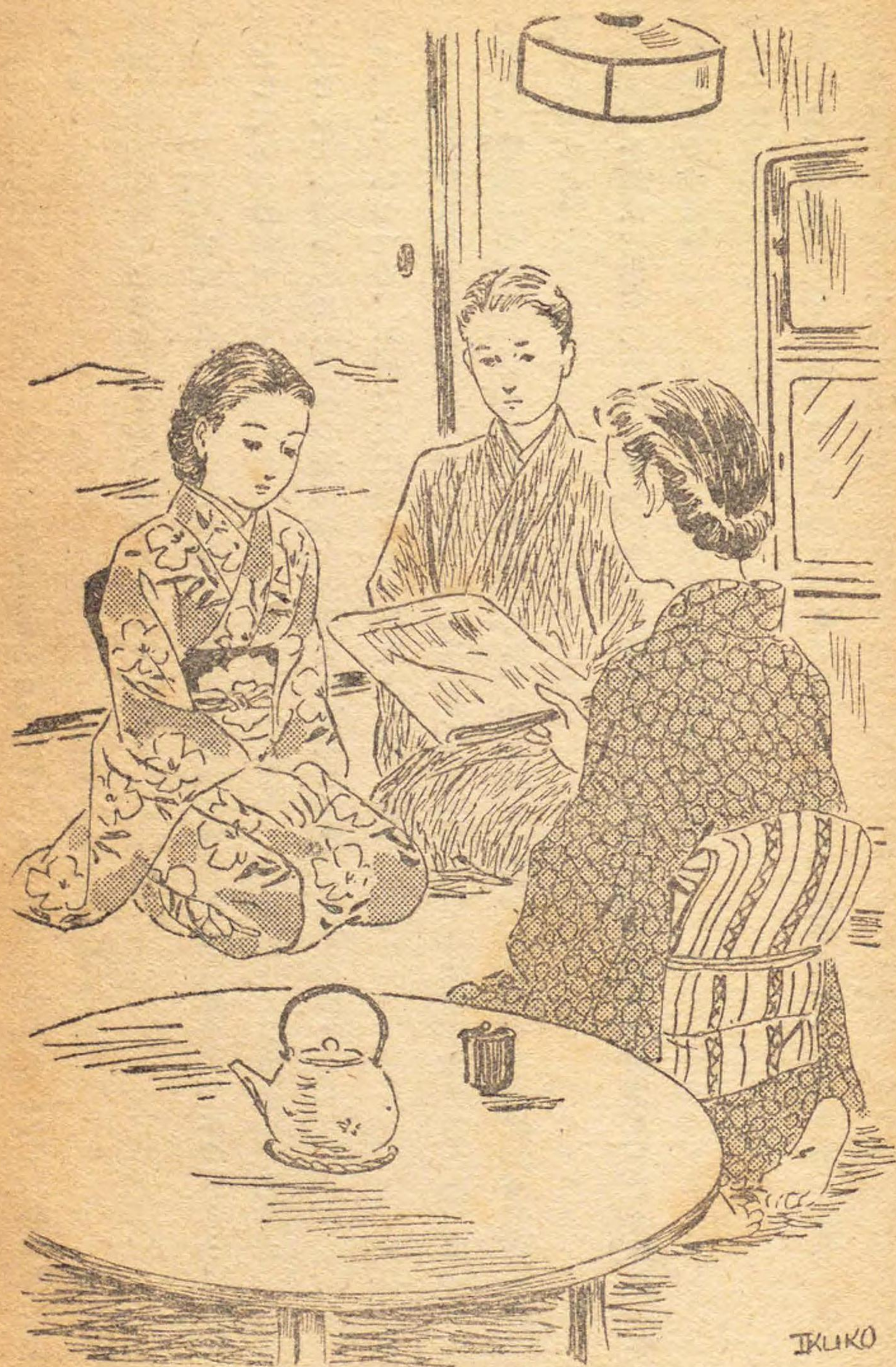
『あつ』

おじいさんは、びつくりして目をさましたのでした。

(そうだ、自首しに行くんだ)

とすぐ思い出しました。

そして、そつとおきあがると、勝手知つた裏口から、音を立てないようにそとに出て、駐在所へととぼとぼあるき出しました。けれど、そこへついて、赤い電燈の下に、こうこうとあかりが輝やいているのを見ると、おじいさんは、きゆうにおじけづいたのでした。



佐野みつ子は、その日の朝、いつもよりずつと早く、うながされて家を出ました。目をうるませているのは、前の日の「とやま新報」に、「少年放火」という小さい記事が出て、そのあとの小見出し

りました。

『早くおいでよ』
それは、わが子である澄三の父です。ぶるぶるふるえながら、おじいさんの手が、井戸げたにかゝりました。

『……』
暗い井戸のそこから、澄三の父が、手まねくような気がして、おじいさんはぞつとしましたが、死のうときめた心は、もうひきもどしようもありませした。空が、白みかけているのも、おじいさんは気がつかずに、やせた顔を、青ざめさせていました。
よるめくおじいさんを、井戸のそこから、呼ぶ声がしました。

に、「女先生のなさけ」とだいをつけたところがあつたことがもとで、その夜、母にしかられたからでした。

新聞に出されることが、大きいな母は、みつ子にいきました。

『あなた、差入屋さんに自分で行つたのね。そんなことかるとはすみだと思ふよ、みつ子……。まして先生をしているのに』

『先生をしているからこそ、みつ子がわざわざ行つたんですよ、お母さん』

兄が、そういつても、それは火に油をそゝいだやうなものでした。

『では、あなたも名をかけたようだから、みつ子のしたことを、かるとはすみすぎるとは、思つていなんだね。電話一つでできることを、わたしにかくすために、わざわざみつ子が出かけたのが新聞に出たもですよ』

『母さん、それは、わたしのかるはずみでしたの……。つまらないことで、母さんをご心配させたくなかつたのですわ』

みつ子は、わびました。

『それにね、母さん……。そうさせたのも、もとはぼくですよ。なぜつて、その火をつけたという少年が、お母さんも知つている高木松一君の弟で、おまけにおじいさんの罪を、自分でひきうけて自由

して出たんです』

『まあ、まあ、そうだつたの』

母は、泣き出してしまいました。

『ほ、ほんとにそんなことを、す、する子を、見つけ出してあげて……。みつ子許しておくれ……。母さんに心配させまいとした、お、お前のやさしさは、こんなにわたしを泣かせますよ』

そういつて、またさめざめと母は涙を流しました。

『いゝえ、母さん、わたしこそ、かくして出かけたりして、新聞だねになつたんですもの』

と、みつ子も、たまたまなくなると、一しよに泣いてしまいました。

『ふゝゝゝ、ふゝ』

兄もさそわると、泣き笑いをしながら、母をみつめました。

『これで、なかなかおりはすみましたね。もう泣くのはやめて、あとのことですがね、ぼくは、あの澄三君が、いよいよ裁判にまわされたら、富山一の弁護士をたのむつもりなんですよ。お母さんも、それをぼくのせいたくと、思わないでくださいよ』

『お、思うものですか……。そんなことを思つたら、ば、ばちがあたりますよ』

これが、この朝、みつ子を涙ぐませている原因でした。

町を出はすれると、みつ子は村の裏道うらみちをとりました。

みつ子は、海への道みちを、小いそぎにあるいで行きました。およしの働きに行つてゐる船主ふねぬしの家によつて、お母さんやおじいさんのようすをきいたり、富山とやまのこともきいたいからでした。電話でんわをかけて、二郎のはなしで、およしが出かけたらしいことはわかつたものゝ、そのあとのことはわかりませんでした。

みつ子は、およしがきているかしらと思つて、船主ふねぬしの家にはいつて行きました。
『まあ、先生』

そういながらおかみさんが顔を出しました。

『およしさん、来ていないんですの』

『え』

おかみさんは、みつ子を見つめました。

『まだ来ません。おそいんですけれども……。なんなら、うちの子を呼びにやりますですけど』

『いゝえ』

みつ子は、そのまゝそこを出ようとして、たのみました。

『あとで、およしさんがきたら、ちよつと漁業組合りょうぎあひあひから、学校へお電話してくださるよう、つたえて

いたゞきたいんですけれど……』

『いゝですとも』

『では、おねがいます』

みつ子は、あいそよいかみさんに見送られて、そこを出て行きました。

(せつかく早く出てきたのに、あえなかつた……。澄三すみさんは、どうしたろう。およしさんも、富山とやまであつてきたのなら、きつと電話してくるはずだけど、ゆるされなかつたにちがいないわ)

みつ子はそう思うと、がらんとした教官室きょうかんしつにきて、一時間目からの英語えいごをしらべていました。そのうちに、そこに、三人五人、七人と同僚たかが出てきました。それが、はじめはひそひそとさゝやいていました。それもみつ子の方をじろじろ見ているばかりだつたのに、だんだん人もおゝくなり、はなし声も大きくなると、なにか澄三の家に事件がおこつて、そのうわさをしてゐることが、みつ子にもわかつてきました。

五

『やつぱり孫まごは、かわいゝだろうなあ。それで、ぎやくじようして、気がちがつたんだらうね』

『自殺じそくということは、なかなかできるものではないさ』

こんな声も、みつ子につゝぬけにひゞいてきました。

(あつ、あのおじいさんのことだわ)

みつ子は血の氣をうしなつて、わなわなとふるえ出ししました。それから、よろめきながら立ちあがると、村にすんでいる、男の先生のそばに行つてくちびるをふるわせながら、そつとたすねました。

『高木の家、またなにか起つたようですが……』

まわりが、はつと目を見あわせてだまりました。

『さあ、村のうわさなんですがね』

『……』

みつ子は、まわりの人たちのことなど、なんにも気がつかずに、まっ青になつていました。

『なんでも、あそこのおじいさんが、井戸にとびこんだとか、とびこみかゝつたとか、そんな話なんです……、わたしも、ひとにきいたので、ほんとのことはわかりません。医者の石川さんが、それを見つけたらしいんです。医者だから、呼ばれて、死にかゝつたのをたすけたので、そんなうわさになつたのかもしれないし、こうなると高木は、放火のうえに、また罪をかさねたことになるかしれませんね』

『う、うそです。あれは、おじいさんの身がわりになつたんです』

みつ子は、たまらなくなつて、そういふたいのを、やつとがまんしたのでした。

『あ、ありがとうございます』

みつ子は、泣きくずれようとする自分を、そこからやつと、よろよろと教室の方へ行くことで、どうやらくいとめました。頬をながれる涙を、廊下のまどに向かつてふいていると、かねがなつてくれたので、みつ子は氣をあげまして、生徒の前に立ちました。

やつと一時間をおわると、廊下に出たみつ子のあとをおつてくる少年がありました。

『先生、佐野先生』

立ちどまると、つゞいて同年生の少女たちまで、みつ子をとりまきました。

追つてきたのは、船主の子でした。

『高木では、おじいさんが、ほんとの火つけをしたので、ぼくたちとおなじクラスの高木君はおじいさんを助けるために、自白までしたといううわさになつていゝんです。ほんとは、先生』

六

『……』

みつ子は、そこにいる、少年少女たちの目が、その熱心さで、火のように燃えているのを見てとりました。

それは、みんながみんな、

『そうです。そのとおりです』

とみつ子がいうのを、待ちかまえている顔色でした。

みつ子も、そういいたい、いつて、ほんとのことをうちあけたくなつていました。けれど……、いつてしまえば、澄三をよい子にすることができても、その決心を無にすることになるのです。

みつ子は、血をはくようによろめくと、ガラスまどによりかゝつて、やつと倒れるのをさゝえました。そして、しわがれた声で、そつといゝました。

『そ、それは、神さまよりほかには、ま、まだ、わかりません』

『……………』

『でも、きつと……神さまは、きつと、みんなが、のぞむように、たゞしいおさばきを、してください。……ですから、そのおさばきが、きよう……』

みつ子はそういつて、はつとひらめくように、つよく身にくる力を感じました。

『きよう、きよう、きようにでもくるように、こゝで、キリスト教ならキリストさまへ、佛教ならあみださまへ、神教なら村のちんじゆさまへ、

(高木さんが、たゞしくさばかれるように)

とおいのりしましょう。いゝでしょう、みなさん。……では、わたしはあみださまへ』

『はい、ぼくはちんじゆさまへ』

『はい、わたしはキリストさま』

『はい、わたし立山の雄山神社へ』

みつ子がひざまずくと、船主の子をはじめ、少年も少女もみんな、そこにひざまずきました。そして、頭をたれて、心からのりをさゝげました。

清らかな祈り、正しい祈り、やさしい祈り、みつ子の頬を涙がながれました。こらえていた涙も、もうこのとき、おさえなくとも、はずかしくはありませんでした。

子供たちも、みんな涙のあふれ出るまゝに、あたゝかい涙をこぼしました。

立ちあがると、みつ子の心はすがすがしくなつていたのでした。

『さあ、みなさんすぐ二時間目ね。では、そのうち教室で、あいませわ』

みつ子は、教官室にもどりました。

そのみんなの目が、みつ子の泣いた顔にそゝがれました。けれど、そのなかには、廊下のむこうから、生徒といのつてゐるみつ子を、感心して遠くから、だまつて頭をさげてはいつた人もありませんた。

教頭もその一人で、立つてくると、みつ子にいゝました。

『いまはありがとう、佐野さん。……ちやうど社会科のあとで拜見したのですが、前の時間にも、二年生はほんとの二三のほかは、高木は祖父を助けるために、わが身をぎせいにしたのだから、それはよいおこないだと、考えていることがわかりました。』

たゞ、そのほかの二三のなかで、

(高木の自白が、悪事をしたのを知つていて、祖父を助けるためならば、そんなことはやめねばならぬ)

といふはつたのは、ぼくも賛成ですよ。

(ほかに犯人がある)

といふ出したのも一人あつたのです。

(アルバイトしている高木が、寝たあとで火をつけにおきられるなんておかししいし、高木のおじいさんも、よく知つてるが、氣の小さい正直者だから、つきたいと思つても、きつと放火を思いとまる) というんですがね。これはさばつのようなので、なかなか考えていると思われるので、あなたへの参考にして下さい、はゝゝゝ』

『……………』

みつ子はだまつて、頭をさげると、つゞいて二時間目の課業に出て行きました。教官室の氣分が、

朝からずつとちがつていることは、すぐわかりましたが、みつ子の胸は、すっかり晴れたわけではありませんでした。

(澄三のおじいさんは、どうしたか)

ということになると、やがて正午になつても、なんにもわからなくて、およしからの電話もかゝつてきませんでした。

ひるすぎの第一時間もすんで、みつ子はほつと息をつきました。そして、また早退けをしようとテールをかたづけしていると、校長室から呼びにきました。みつ子は、あわてゝ、そこに行つてドアをあけました。

すぐ、みつ子は、お客がきているのを見ました。

『まあ』

みつ子は、びつくりして声をあげました。

『石川先生が、わたしにもご用で、お呼びになりましたの』

『はゝゝ』

笑つたのは、村のお医者さんの石川老人で、そこにひとりきりでした。

『まあ、おはいり、佐野さん……、校長さんにたのんで、あなたにこゝへきてもらつたのは、この石川

での。わしは、いま富山からの帰りがけじゃ』

『……………』

『さあ、おかけ……………、これからまた、あなたに、村へ行つてもらわなければならぬからな』
『まあ、どうしてでしょう。わたし、どうせ、先生のおうちにも、およりしなくては……………、と思つて
したのですけれど』

みつ子が、けげんな顔を見ると、石川老人はまた笑いしました。

『は、その用も、あらかたわかつとる。高木のむすめにあつて、次男がどうしとるか、これをき
くこと、わしにあつて、高木のじいさんが、井戸へとびこんだことをたしかめる……………きくかじりの
村のうわさより、佐野さんには、なにかもはつきりせねば、気がすまぬというところじゃろ』
『は、はい、そうですの、わたしは……………、澄三さんのおじいさんが、どうしたか、それが心配でたま
りませんわ』

みつ子は、涙ぐんで、老人をみつめていました。でも、老人はだまつているのでした。

『……………』

見ていると、ケロリとして、すばすばたばこをくゆらせているので、まさか、おじいさんが死んだ
のではあるまいと思われました。

が、この老人には、かわつたところがあるので、安心はできません。

七

石川老人のよいところは、医者としてみたてが上手なことでした。それに、いそがないときは、夜
でもてくてく歩いてくれて、薬代も安く、病人からなるべく、お金をとるまいとしてくれるので、と
てもよくはやるのでした。そのかわり、病人をみて、

(これは助からない)

と思うと、まさか、本人にはいけません、

『薬はむだだよ。うまいもんでも、たくさんたべさせておやりな』

と家の人にはつきりいゝ切つて、氣安めの注射などは、なるべくしたがりませんでした。そして、
このため、金持からことわられたりしても、わらつて、

『高い薬を、むだにしないですむから、ありがたいよ』
と平氣でいるのでした。

ですから、これをいやがる家もあつて、よく悪口もいわれるのでしたが、こまつている人からは、
神さまのようにやまわられていました。

みつ子は、その老人の前で、

(やはり、いつてくれなう)

と思うと、自分がいじらしくて、泣きたくなつてくるのですが、にこにこしている人を見ると、涙をこぼすこともできませんでした。

老人は、時計を見て、立ちあがりました。

『ほら、校長さんもくるから、一しよに出かけましょう。佐野さんしつかりしているから、いゝ生徒も出る……これから一つ、校長さんにも、放火の实地検証を見せてあげるわけだな』

『まあ』

みつ子があきれていると、ほんとかねがなつて、校長がもどつてきました。老人は、しゃべりながら、したくをさつさとすませてしまつたので、みつ子もあわてゝ、教官室にかけこんで、やつと出してきました。老人は、もうことごとく、ステッキをならして、玄関に立つていました。なれたカバンをさげて、歩き出すと、老人は、若いみつ子より早いくらいで、校長がやつと門前でこれに追いつきました。

『検事さんなど、もうこられているでしようか』

『いや』

石川老人は、首をふつて、村の細い裏道をいそぐのでした。

『石川さん、道がちがやあしませんか。おうちにしても、高木のうちにしても、こちらを行くと、と

おいようで』

『……………』

みつ子も、そう思つていたのでした。

『まあ、ついでおいで……………』

老人は、にこにこしていゝました。そのくせ、足をとめないで、歩きながら、おしゃべりをはじめました。

海への村に波の音がひびいて、風が少し出てきました。

『いゝかい、おきゝよ。わたしは村で生まれて、村でそだつて、やがておやじの医者をついだのだよ。いゝやな話は多くあつたが、いゝ話というものはなかなかない。小さいときから、きいたのは、そのいゝやな話ばかりじゃな。』

(一生にいちど、いゝ話をきゝたい)

それが、わしのねがいだつたのじゃわい。

(それもこの村でこの土地で……………)

少しよくばりかもしれんが、この水橋で、そうした話をきゝたかつたでな。

どうも、きょうは、それを、目の前にみて、目の前にきくんではないかと思うんじゃないか。わしはうれしくてならんのだ。

で、わしのくせで、佐野さんには、おねがいするが、少しかくしておきたかつたこともあるし、びつくりさせたいこともある。もう、東水橋口駅ひがしすずはしぐちえきについたから、これでやめとくが、びつくりすること、このへんからはじまるかしれんで、は、は、は……』

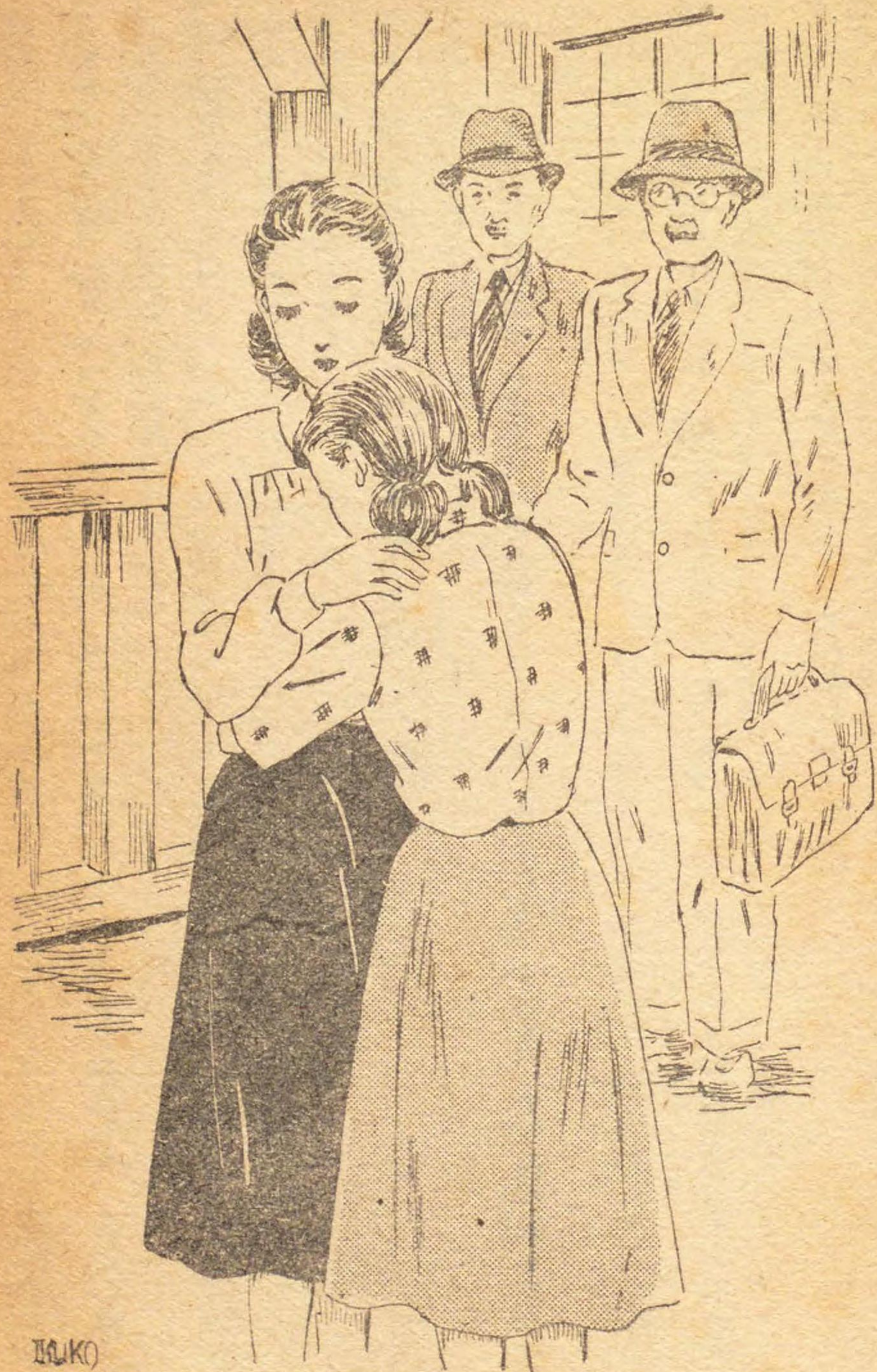
みつ子は、老人の話が、だれのことかすぐわかると、かくされていたことも、かえつてありがたくて、目頭に涙をわかせていました。

(澄三さんのおじいさんも、きつと生きている。そして、澄三さんも執行猶豫しつこうゆうぎょとかになるのかもしれないと思いました。)

(やはりきようだつた)

と生徒たちと一しよにした、いのりの前に、心にひらめいたものが、いかにもとうとい知らせだつたことがわかつて、胸にいつばい明かるいひかりを覚えました。みつ子は、頬をながれる涙を、そつとふいて、東水橋口駅の小さい入口まで、石川老人のあとについて行きました。

『さた、さた……』



ISUKO

老人がいゝました。

見ると、そこに、燃えたつような頬をして、だれかをまつているおよしがいました。およしは、老人よりも、まずみつ子をさきに見つけました。

『あ、佐野先生……』

およしは、みつ子にすがりつきました。

『すみません、すみません……』

およしは、みつ子にすがつて泣き出しました。

『まあ、およしさん……』

みつ子も思いがけぬおよしを見て、その肩を強くだきしめました。すると、また涙が頬をながれるのでした。

『あはゝゝ』

石川老人は、このむすめが、澄三の姉と知らずに、あつけにとられている校長をふりかえつて笑い出しました。

『はゝ、びつくりすることはまだまだ……、これからですわ』

校長は、それをきゝながら、若い二人の女たちの涙にむせんでいるようすを、だまつて見つめながら、(これから、これから……)

と石川老人の言葉のおわりだけを、なんにもわからずに、胸のなかで、くり返していました。

『はゝ、はゝ、はゝゝ』

老人は、うれしそうに笑いつゞけましたが、笑いながら、その目はやさしくうるんでくるのでした。

第六章 美しき心の國

夕方近く、この北の國の平野に、風が出てきました。それは、海から陸にあがつてきて、立山山脈をめぐって、押しよせて行きました。

小型の自動車が一つ、海べの北國街道を走つていました。

うしろのこしかけにいるのは、右に澄三で左が永井検事です。前のこしかけには、裁判所の書記

が、窓の景色をながめていました。

澄三にとつては、これが生れてはじめて、自動車にのるのでした。でも、うなだれていると、それはどんどん町や村をうしろにして、走りつゞけました。悲しさがいつばいで、そとはとても見る氣になれませんでした。

検事さんは、だまつて目をつぶつていました。ときどきどのへんかと、目をあくので、ねていないのがわかりました。曇つた空をわつて、日のひかりがおちてくると、車のそとが、かつと明かるくなり、またすぐかげりました。

この日、澄三は、朝のうちに留置室からひき出されて、検事室につれて行かれたのです。

『検事さんは、ひるすぎでないところないからね、それまでこゝでまつんだ。ひるめしはこゝへはこんでやるであら』

『……………』

澄三は、すなおにうなずきました。

看視の老人は、その澄三のいじらしい様子を見ると、かくしておかない方がいゝと思つたらしく、やさしくいいました。

『うす暗いところより、こゝの方ずつといゝだ。検事さんから、けさお電話でな、こゝへうつすよう

言われてきたゞからな、そのつもりで、うそづくでねえぞ』

『は、は』

ぎよつとした澄三は、なんにも知らずに老人が出て行つてからも、しばらく胸のどろきが、しずまらないほどでした。

そのふかくやわらかい、クッションのつきたいすに、じつとしてみると、眠くなつてきました。

澄三はこくりこくりと居眠りをはじめました。お腹がくちくなるかねむくなる。それはほんとでした。

まして前の晩に、少ししか眠らなかつたのですから、これはむりではありません。

すると、ふしぎなことに、ドアがそつとあきました。そして、黒い小人が、そこからするりとはいりこんできたのです。それは、邦雄からもらつた本のなかに、書いてあるのとそっくりで、澄三をすぐに、ドアのせまいあいだから、つれ出しました。

澄三は、どうしてか知らず、海の上を歩いて行くのでした。

澄三は、ときどき海で見たことのある、しんきろうにつきました。

『あつ』

びつくりしたことに、そこには父をはじめ、みつ子、およし、邦雄、その姉さん、それにおじい

さんまでここにしているのです。

『……………』

澄三は、そのときだれかに呼ばれたようでした。

『もしもし、おきなよ、ひるめしだ。差入れたのは、検事さまのおうちからだぞ、はゝゝゝ』
目をあくすと、そこにいるのは、父さんでも姉さんでもなく、看視の老人なので、夢をみたことが、すぐわかりました。そして、おべんとうをのぞくと、二つかさねたお重箱の上に、「くにお」と自分で書いたらしい、名ふだがついていたのです。

澄三が、自動車で、書記と一しよに、裁判所を出たのは、それから、ずつとまたされてからで、検事さんはとちゆうの町かどでつて来たのです。

やがて、ふいに書記がさげびました。

『や、立山だ……、立山があらわれたぞ』

『……………』

その声にびつくりして澄三は窓の外を見ました。検事さんも、澄三の方にすりよつて外をのぞきました。そこには、しばらくのあいだ、雲がわかれて、雪の立山のまっ白いがたが走りつゞける自動車のまどから、とおくおおき見られるのでした。それは、前大日山、おく大日山の上に、かなりながいあ

いだあらわれていましたが、そのうちに雲がまたかゝつて、消えるようにかくれてしまいました。

検事さんは、

『あゝ、よいものを見た』

といいながら澄三の顔を見てにつこりされました。

きのう、その検事さんに問いつめられたとき、澄三は検事さんに、なぜかはむかいたくなつていました。けれど、ひるめしの「くにお」の名ふだの差入れや、いまの言葉のやわらかさをきくと、心がすつかり安らかになつてくるのでした。検事さんが、すりよつてしめしたしたしさも、心にうれしかつたのです。

自動車が、水橋村にはいつて、石川さんの門前でとまりました。書生がとび出してきて、なかの検事さんにいきました。

『先生は、まだこちらにお見えになりませんが、みなさまはもうお見えで、ぶらぶら歩いて行くからと、おことづけでした』

『そうかね』

検事さんはうなずくと、運轉手にいゝつけました。

『こゝからまつすぐだ。四つ汁でありるから、そこから石川にひつかえしたまえ』

『は』

『こんやはみんな帰るよ。少しおそくなるだろう、にんげんもおゝいが……』
自動車は、ゆつくりまたすゝみました。

二

まだ日はくれていませんでした。

『……』

いまになつて、澄三にわかつたことは、検事さんが自分の家に行くということでした。いやでも、
検事さんに連れられてわが家に行くよりほかにありません。

そこで母や姉やおじいさんにあうのは、いやなことですが、一方にはなにかうれしいことでした。

自動車は、四つ辻の手前で、三人づれの人たちをぬいて、やがてなかの三人を、そこにおろしまし
た。

あとからくる人たちを、まちあわせている検事さんを見ると、よくにた脊の少し高い人が、澄三を
みつめながらいました。

『兄さん、これが、高木君の弟なんですか』

『そうだ』

検事さんがうなずくと、その人は澄三のそばによつてきて、なつかしそうにいました。

『ぼくは、ナホトカで、君の兄さんのせわになつて、さきごろやつと帰つてきた、この永井検事の弟
だよ。とよにはまつたおいの邦雄を、助けてくれたそうで、ありがとう。お礼をいうよ』

『は、は』

びつくりした澄三は、この知らない人と一しよに、邦雄とその姉まで、ここにしているの、たゞ
顔をあからめていました。

検事さんは、これを見るとにつこりしてしまいました。

『ごどもたちは、一しよにおもて道をおいで。わたしは、おじさんとうらから行くからね』

『あゝ、そうするよ』

邦雄は、うれしそうでした。そして、その姉と澄三をうながして、肩をならべて行きました。わか
れた検事さんと弟は、書記と一しよに裏道へはいつて行きました。

澄三は、すぐ気がつきました。

『邦雄さん、きようはすみませんでした。おべんとうを……』

『ウ、ウン』

邦雄はいました。

『あれは、おじさんのお祝いなんだ。それを、母さんと姉さんがつめるのを、おじさんもそばで、
(もつと、もつと……)』

つてつめさせながら泣いてるんだ。

母さんも泣きながらだし、姉さんも泣きながらつめてたから、少ししよつぱくしやあしないかと、
ぼく心配したよ』

『いや、邦雄さんは……』

その姉がいました。

『邦雄さん、きのうのおひるのとき、いつてしまえばよかつたのに、けさになつて父さんから、あな
たが裁判所に来ているときかされて、びつくりして泣きながら、とよにはまつたのを白状したの。』

わたしも、叱られてしまつたわ。

でも、おじさんが帰つてきたら、ほんとのことをいうつもりだつたの。

わたしたち、あなたが父さんを失くして、母さんが病氣しているなんて、なんにも知らなかつたじ
あなたがおじさんの身がわりに、裁判所にきたなんか、それこそ思いもしなかつたの。ほんとにこ
めんなさいね』

『あつ』

澄三は声をあげました。

『あなたの父さん、ぼくがおじいさんのかわりに、火をつけたと自白したと、あなたたちにもいつた
んですか』

澄三は、まつ青になつて、そこに立ちどまつてしまいました。

『そうよ』

その姉も、邦雄も、平氣でにこにこしていました。

『父さんは、けさ早く、こゝの石川のおじいさんと、長いこと話をしたの。それも、石川のおじいさ
んが、お父さんのおむかえにきたからよ。こゝへきたのも、ほんとに火を出した者を、つかまえるた
めらしいのね』

澄三は、ふるえながら、声も出さずに、涙をこぼしました。

『も、もう、だめだ。おじいさんが、つかまつてしまう』

『いゝえ』

その姉は、はつきりしていました。

『おじいさんも、火をつけるしたくはしたけれど、つけはしなかつたんですの。とにかく火事はあつ
たのね。でも、その火事は、』

(どうも、つけようとして、つけたのではあるまいて) つて、お父さんがいつてたわ』

『……………』

澄三は、あきれかえつて、泣くこともわすれていました。まるで、きつねにつまぐれたような話で、それがうそで、自分への氣安めのような氣もするのです。そのうちに、澄三ははつとしました。

(あのときに、

火車だッ』

とどなつたのは、納戸はんだからではなく、うらの方からだつた。

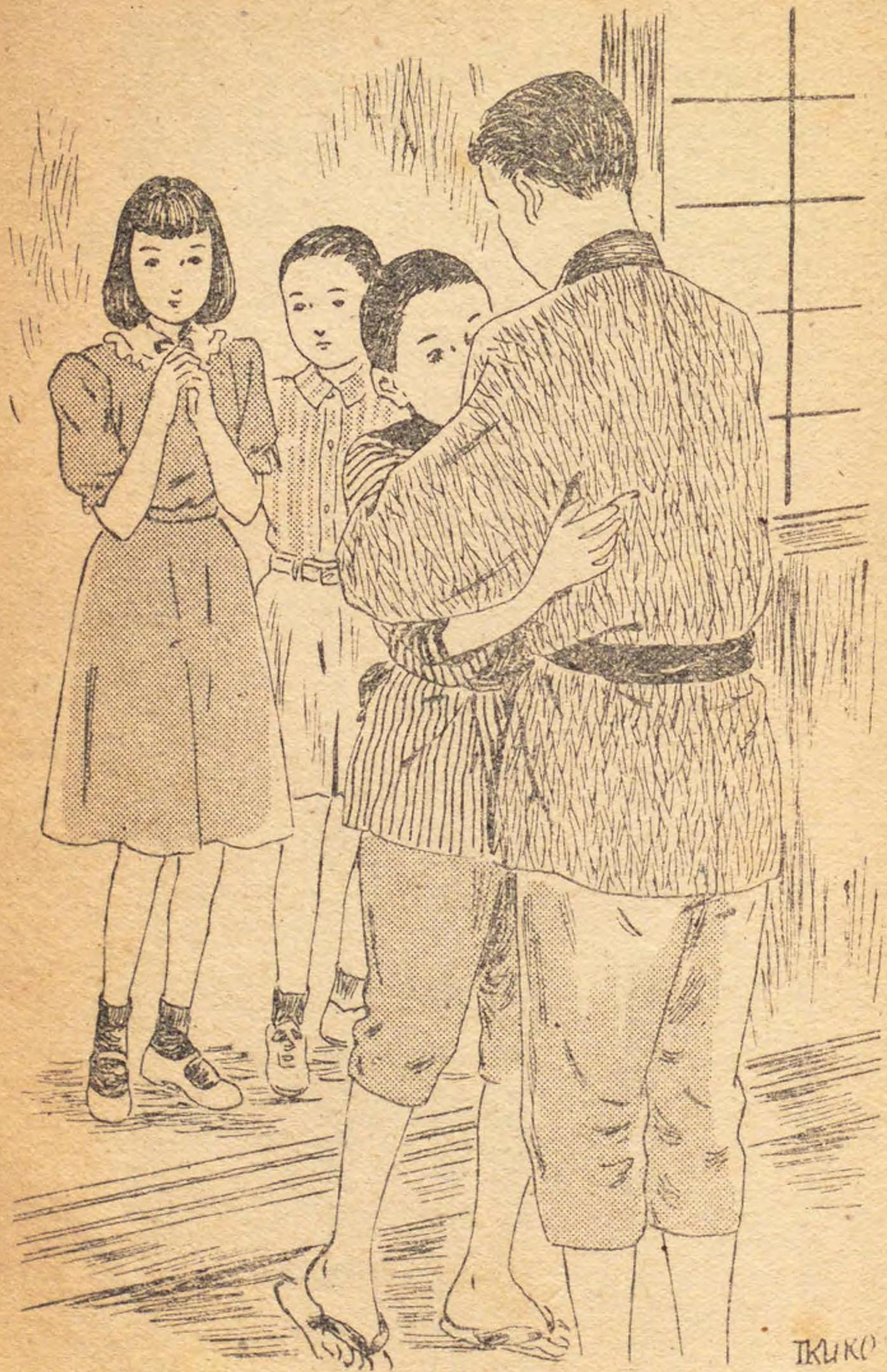
それも、きくおほえのある声だつた。

そう思うと、澄三は、そのまゝ歩き出しました。

『さ、行きましよう』

澄三の顔は、急に明かるくなつて、しつかりした足どりになりました。そして、家の表口おもてぐちまでくると、そこから一つの顔がのぞいているのを見ました。澄三はもう考えるひまもなく、

『わっ』



IKUKO

と叫んで、いきなりその人に、むしやぶりついたのです。

三

声をあげながら、相手にしがみつくと、澄三はたゞもう泣くばかりでした。相手も、澄三の肩を強く抱きしめました。

『泣くな、泣くな……』

そういふながら、その人もぼろぼろ涙をこぼすので、それがあたゝかく、澄三の肩から、胸、うでまで、ぬらしてしまいました。

それは、あかどねいろの顔をした、がつしりした体の四十男なのですが、そこにいるおおぜいの人たちも、その男が涙をながしているのを、笑おうとはしませんでした。それどころか、その男の涙と一しよに、すゝり泣く声まで、もれてきました。

邦雄と、その姉は、これを見てびつくりしましたが、やがて、その事情がすっかりわかりました。

それは、澄三が、相手に、離れまいとすがりながら、

『と、父ちゃん、父ちゃん』

と、いつているからでした。

海へ行つて、帰らなかつた父が、いま帰つて来たのであります。

それは夢にも思つてもいないことだったので、澄三はうれしくて、とびついて行つたのはあたり前ですが、邦雄とその姉も、はじめはわけがわからなくてあきれたのですが、事情を知るとともくあつた涙をこぼしたのです。

『よかつたわね、澄三さん』

『ほんとによかつたね、お姉さん』

姉と弟は、涙をこぼしながら、さゝやきあいました。

そこには、澄三の家で、火つけ事件の現場実検のあることを知つた村の人や、駅から父が帰るのをみつけてついでにきた人たちもいました。そのなかには、こどもたちも、たくさんまじつていたのでした。

『よかつたのう、高木でも……』

そういつたのは、大人たちでした。

少女たちは、たゞ泣くばかりでした。でも、少年のなかから、声がおこりました。

『澄三君のおじいさん、どうしたんだい。おじいさんが、火をつけたのなら、澄三君に罪はないじゃあないか』

この不平は、だれにもあつたらしいのです。

『ほんただ』

『そうよ、そうよ』

そんな言葉が、さくやかれるかと思うと、はつきりと、おとながいました。

『それだから、澄三が検事さんの子と一しよにきたんだ。これから、高木のおじいさんが、生きてりやあかわりにひつばられるんだぜ』

そのとき、父と子と、永井検事の子の邦雄とその姉が、なかから顔を出した石川老人に呼ばれて、家のなかにはいつてしまいました。でも、おもてにいた人たちは、まだそこを立ち去らずに、つぎになにおこるかかと、まつているのしでした。

澄三は、父の手につかまつたまふ、家のなかにはいりました。

『……………』

泣きはらした目で見まわすと、泣きむせんでいるおよしが、涙の母をさして、その父と澄三にいゝました。

『と、父ちゃん、母ちゃんにろくに帰つたあいさつもせんでよ』

『いゝんだよ、およし』

その母は、ねどこにすわつてゐるのですが、しつかりした声でいゝました。

『それよりも、澄三……、みなさんに、早くあいさつした。おめえのために、こうしてきてくださつたでよ』

『は、はゝ』

澄三は、おじぎをしました。そして、せまい家のなかに、検事さんや邦雄のおじさんや、佐野先生、校長先生、石川老人それに勝吉と二郎まで、そこにゐるのに気がつきました。

土間のすみに立つてゐるのは、滑川署の少年係で、村の駐在所の老巡査も、そこにゐました。

そして、そのかげの古びたテーブルにむかつて、自動車で一しよにきた書記が、なにやら書いてゐるのへ、上りはなに腰をおろした検事さんが、なにやらさくやいてゐるのでした。でも、テーブルのそばに立つて、じつところをみつめてゐる、やせさらばえた人。それは死んだはずのおじいさんです。

『お、おじいさん』

澄三は、呼びたくても、その声が出てこなくて、くるしく涙をながしました。

みつ子は、東水橋口駅の入口で、澄三の姉のおよしに会いました。そしておよしの父が、ひよつこりかえつてきたことをききました。

『ま、まあ、ほんとなの……』

『え、まるで夢のようで……』

『でも、うれしい夢ね』

『は、は、佐野さん……、どうだ、びつくりしたろうがな』

石川老人が、そばからいきました。そして、さらにつづけました。

『うれしいことはそれだけではありませんよ、佐野さん、あんたおどろいちゃいけませんよ。高木の
おじいさんが、生きかえつたんです』

『ま、まあ、澄三さんのおじいさん、死になどしなかつたんですか』

みつ子は、目を見はつていきました。

『は、は、ほれ二ど目のびつくりじゃな。これは、およしほうもいるからたしかじやが、校長さんもあ
んたも、村のものとしよに、いろ／＼なうわさでなやまされたらうで、ほんとの話をきかせますとな。
わしは、けさ夜あけに、夕べからひどくわるい病人があつてな、富山のむすめから、

(義弟が午前中にひきあげてくるから、せひきてくれ)

といわれてきてあるで、行けるかどうか、見に出かけた。さいわい病人はよいし、よろこんで帰つ
てくると、あのおじいを見かけたじや、なんだか、きちがいじみた様子でな、わしもほおつておけな

くてあとをつけた。そうしたら、井戸へとびこもうとするんじや。

なにしろ、おじいのは夢中だろ。つかまえて、ようやくこれを止めたが、およしほうがおきてきてく
れなんたら、おじいも井戸にざんぶりこしたかもしれんほどじやつたよ。それからあと、うちへつれ
こんでいろ、きくと、火つけはしたおほえはないが、澄三を助けたいから死にたいと、しきりにい
はつとるわい。そのうち夜があけてしもうた。しかたないから、納戸にとじこめて、およしがみは
り、わしはうちへいちど帰つたもんじや。

(どうしたもんじやろ。とにかく富山へ出かけるかな)

わしはそうきめて、行きがけに、また高木によつたんじや。

するとこの電報が、そこについていて、おじいもわしにわびた。富山の永井も、それがもて、現
地検証となつたわけじやわい。ほれ、話のうちに電車がきた。およしほう、おやしあれにのつとらう
で、目をはなすでないぞ』

と老人の話は、そこでうち切られました。そして、そのとおりに、澄三の父は、その電車にのつて
なつかしい自分の村に帰つてきたのでした。

四

澄三が、そこで、おじいさんをみつけたとき、おじいさんは、ほんとにしよげかえつていました。

それは、澄三よりさきに、裏口からはいつた永井検事が、とつくに取調べを、はじめていたからです。

この検事さんは、なんでもよく知っていました。それは、だれのあんなにもうけずに、裏道をまわると、物置から井戸までものぞいてきたのでもわかります。が、ほんをいえば、検事さんは、村の駐在所の老巡査が、わかりやすく書いた、この家のくわしい地図を、ちゃんとひざの上に、ひらいてゐるのでした。

みつ子は、その前で、おじいさんが、ぼろに石油をそゝいだことを、くわしくたずねられたのをきいていました。

検事さんはいきました。

『すると、あなたは……澄三君が、そのことをしらないで、帰つて声をかけたというんですね』

『はい、そう思うですが、あとでよく考えると、あれはそれを見て、おどろいてひつ返して、また足音をたてよきたよと思えます。どうしてというかと、あれはいつも足音をさせない方なのに、そのときの足音が、ひどく高かつたでして……、きつと、あれが、わざと、足音をさせたにちがいないでして……』

『……………』

永井検事は、少し考えていました。それから、きびしい目をしました。

『あなたは、火事のおこつたとき、どこにいました』

『えつ』

『納戸にいたのでしよう。それは、もうわかつています』

『そ、そんなこと、澄三がいきましたですか』

『そうです。滑川署では、そういつています。そして火事がはじまると、(なにも、持ち出すでないぞ)』

とどなりながら、たぶん保険証書などをつんだらしいつゝみを持つて、ざしきに出てこられて、おきた澄三君が、本箱など出すのを見ていたというのが、澄三君の自白なのです』

『あゝ』

おじいさんは、まつ青になつてしまいました。問いつめられて、それをうなずいたもおなじなのでした。そこに、澄三が、父をみつけた、表の戸口の事件がはじまつて、やつと、それもすんだのでした。そのあいだ、調べはやめられていましたが、おじいさんのしよげ切つてゐるのは、そのためなのでした。

澄三を見ると、永井検事は、澄三をそばへ呼びました。

『父さんが、帰つてよかつたね』

『は、は』

『でも、おじいさんは、君が自分をかばつてくれたので、こんどは君をかばおうと決心して、とうとう井戸にとびこもうとまでしたのだよ。それをうまくとめたのが、わしの義父の石川なのだ』

『……………』

澄三は、びつくりすると、たゞ涙をながしていました。検事さんは、それをやさしくみつめて、目をうるませながら、書記に目くばせしました。

『見たまえ。おじいさんの「カキオキ」も、こゝにある』

『……………』

澄三は、涙の目で、わなわなふるえながら、それを見ました。大きなかたかなの字で、

カキオキ オレヒツケシタジシユシニイクカラナ サヨナラ

これは、そのうす暗い電燈でも、遠くから、だれにでもよく見られました。おじいさんが泣き出するとみんなも泣き出しました。それをこらえているのは、警察関係の人たちのほかは、石川老人と

ひきあげてきた弟の永井と、小さい澄三だけでした。

永井検事は、そこで、また書記に目くばせして、それをたゞませてから、しばらく目をつぶつて、氣をすめていました。

それから、しんとしたなかで、だれにもきこえるように、ゆつくりいゝました。

『澄三君、きみも……かきおきをいまよんだらう。いかにおじいさんが、放火したといふはつても、それは、きみを助けたいう、そなのだ』といつてから、

『それに……………』

永井検事の声は、おこそかでした。

『君が、自分で、放火したと自白したのも……、やはり、おじいさんを助けたい、うその自白なことがわかつたのだ』

『……………』

そこにいた人たちは、みんなとなりの人と、目を見あわせました。それは、びつくりしたというよりか、なにがなんだかわからないような氣がしてきたからです。

(火をつけたのは、いつたいだれだろう)

みんなは、たゞきつねにつまされたように思いました。

「はてな、はてな……」

と心で、くりかえすばかりです。それからまた、火事の時、自分はそこにいなかったのに、その自分までをうたがってみて、

（はてな、自分は大江ようぶだろうか）

われとわが身をふりかえつてみるのです。

しいんとしているながら、あついものが、胸にわいて、だれも、ぼうつと、頬をあからめ、それからまたすぐ青ざめるのでした。ほつ、ほつとあつい息がだれからもれて、息づまつたくるしさで、だれもおしつけられたまゝ、身うごきさえできなくなつていました。

五

そのなかで、永井検事がつゞけました。

『そのしよ、こが、あります』

検事さんの目は、おじいさんをみつめました。

『おじいさん、あなたにきくんですが』

『は、はい』

『あなたは、たばこをすいますか……。いや、たばこといつても、まきたばこを、そして場所は物置

のなかで……』

『は、はい』

みようなことをきかれて、おじいさんはへんな顔をしました。

『わしは、たばこはすきな方ですが、それもきざみばかりで、まして物置ですつたことなど、いちどもありません。持つて歩くこともないので、すうのは納戸だけで、さしきまで、そのきざみを持ち出してきたこともないですぞ』

『それでわかりました』

永井検事は、うなずいて、氣にいつたようにつこりしたのでした。

『ではもう一つ、よけいなことですが……。おじいさんが、物置をそうじしたのは、いつですか。きうか、おとゝいか、でそのごみを、うら口で燃したらいいですね』

『はい、そうです。きうです。ごみを燃していると、勝吉つあんが、富山から帰つて、見えただんで』

『勝吉君、これも事実ですね』

勝吉も、つまらないことをきかれて、顔をあかくしました。

『へえ、そのとおりでした』

『いや、これで、そのしようが、そろいました』
検事さんの目は、かどやいているのでした。そして、ポケットから、小さくまるめた鼻紙はながみを取り出すと、それをていねいにひらいて、なかから、ごみのようなくらいものと、マッチの軸木じくぎを二つほど、とり出しました。

『……………』

だれも、しよう、こときいて、ほつと安心あんしんの息いきをもらしたもので、これが……、と思うと、また目を見あわせました。

みつ子もそのひとりでした。

(どうしたんでしょ、あんなものがしよう、こだなんて……………)

そう思つて、澄三すみぞうをながめました。

澄三すみぞうは、検事さんのそばで、うなだれていましたが、なぜか、わなわたと、身をふるわせているのでした。が、そのようすをみても、みつ子はなんとも思わずに、すぐ検事さんの方に目をうつすと、その言葉に、きくりました。

『これは、この家のうらにきて、いまひろつてきたものです。そのとき、わたしの弟も、この書記もそばにいて見ていたのですから、たしかなのです。そして、これは、まきたばこのすいがらのきれ

つばしと、マッチの軸木じくぎが二本……………どちらも、物置もの置きのすみに、あつたので、

(おや)

ととりあげたものなのです』

『……………』

『これは、ほんとにつまらないものです。おじいさんなどは、はき出して燃して、うつかりすれば、はいにしてしまうところでしたが、手が悪いので、すみずみまではき切れず、残しておいたわけでしょう。それは、裏口のごみを見れば、まだまきたばこのほんの小さなきれつばしや、マッチのぼうがたくさんまじつているので、すぐにわかります』

『わたしが、なぜ、こんなつまらないものを、宝物たからもののようにするか。そのわけをいいますと、澄三すみぞう君が、おじいさんの身がわりをしていることは、本人を見ないでも、たいていわかつていました。が、わたしは心のなかで、

(よいおこないもするが、ことによると、ぬすみぐせがあるかもしれない)

とうたがつていたのです。

そこに、澄三君がつけられてきました。そして、赤い墓口がまぐちを、わたしの前でポケットからおとしたのです。それは、わたしのむすめのもので、わたしがせがまれて、この春買つてやつたものなので

水橋の海岸でなくしたといわれて、おやばかで、それを信じていたわたしは、

(さてこそ、この少年はぬすみぐせがあるかもしれない。ひろつたものを、とどけないようでは…) と思つたものゝ、家で本人の弟にきいてみると、もじもじして、

(なかよしの子にやつたのが、ほんとだ)

とまたうそをかされたのです。これは、いちどうそをつくつと、それをかさねることになる、一つの例なのですが、わたしは、それを、そのまゝにしておきました。

(姉は、ほんとをいうだろう。それとも、澄三君を責めてみるか……、いやいや、火つけのことがさきだ)

わたしは、そうきめました。それを、澄三君が、わが子の命びろいをしてくれた礼にもらつたと、けさまでたしかめなかつたのですから、これは澄三君におわびしなければならぬし、あらためてお礼もいわなければなりません。それも、そのあいだに、おじいさんまで、苦しめたのですから…

永井検事は、涙をながしていました。そして、澄三をはじめ、そこにいた人は、たまたなくなつてみんな頬をぬらしていたのでした。

六

検事は、涙をふいて、話をつゞけました。

『そこに、かけつけてきたのが、弟のひきあげをむかえにきてくれた、この石川のおじいさんなのです。

(なに、澄三君のおじいさんが、書置きして井戸へ……、父さんも帰つてくるんですつて)

わたしが、驚いたり、よろこんだりしたのは、みなさまのお心まかせにしますが、

(これは、澄三君のためにも、おじいさんが、火をつけたんでないことを、はつきりしなければならぬ)

わたしは、こう決心したのです。

石川のおじいさんも、これにさんせいしてくれました。

(うまく、高木のおじい無罪がわからなければ、検事をやめて弁護士になれ。その手はじめが、おじいべんだ)

(やります。きつと、そこまでやります)

こう話はきまつたのでした。

そして、わたしは、検事としてさいごのおつとめをするつもりで、こちらにまいりました。むかし

のように、腹を切るような考えはないが、

(火はつけられたのではない。火は、だれかど、つける気もなく、出してしまったものだ。これがわからなければ……)

これが、わたしの覚悟だつたのです。

が、こゝへ来てみれば、このことはわけもなく、まるで手にとるように、すぐわかりました。このまきたばこのはしくれと、マッチの棒が、そのしようこになるのです。

これは、そのときばかりでなく、この家の人が少なくなると、物置にだれかど毎晩はいりこんで、すきなまきたばこをすつたことを、しようこだてるものなのです。そのマッチの火が、おじいさんの石油をしめたぼろについたのです。いや、手の悪いおじいさんが、そこらにこぼした石油があつて、これが一ぺんに燃えあがつたにちがいありません。そこで、火を出した男は、びつくりして、あわてゝ叫んだのです。

(火事だツ)

そして、自分で消せないとなると、すぐ逃だしたのです。

男とわたしはいゝます。それは、けつして女ではありません。たばこすきは、たいてい男ですから……』

『……』

きゝすましていただれもが、すつかり検事の言葉に心をうたれて、しんとしてしまいました。風が少しつよくなつて、もう夜でした。永井検事がだまると、風の音だけがまわりにきこえて、家ごとごとと、しずかになるのです。しばらくして……

『わつ』

とおよしが、まつさきに泣き出しました。

涙のながれるまゝに、じつとしのんでいたものゝ、それがこらえ切れなかつたのでした。ほかのだれも一しよにすゝり泣きをはじめて、石川老人まで涙をこぼしていました。

検事さんも、澄三の手をとつてひきよせると、そのからだを、胸に抱いて立ちあがりました。

『みなさん、もう一言もうしますが、わたしは、検事としての仕事を、こゝで澄三君を、家に返すことゝ、おじいさんもおんないないことゝすることゝ、もうおしまひにしたいのです。用意してきた辞表は、あしたさし出すことにします。あとの火を出した男は、どこにいるか知りませんが、あやまちですし、ほんのぼやですから、さがしあてゝも、こゝとぐらひですましてもらえましょう。これは、滑川署と村の駐在所におねがいしておきます』

永井検事は、書記にはつきりといふつけました。

『では、本件は、不起訴にします。これで……』

書記が、その一言をうして、立つておじぎをしました。

だれも、だまつて、それと一しよにれいをしますと、これで、現場検証がおわつたのでした。すぐに石川老人の声が、そこにひびきました。

『はゝゝ、はゝゝ、はゝゝ、校長さんもどうです。こんな話は、水橋はじまつて以来、めずらしいことじゃで、うわさばかりで、なんとかきめつけたがるのが、これでさつぱりするかしれんですわい。では、邦雄ぼうす……、おじさんにぶらさがつて、まつさきにうちへ行きな。

(おじいさんが、もうみんなつれてくるから……)

つて、おばあさんにいうんじや。そうじや、早く行きな』

老人はそれを見送つてつゞけました。

『さあ、みなさん、警察のかたもご一しよに、みんなで、永井の弟もひきあげてきたでな、こゝの主人の生きて帰つたこと、澄三とおじいの無罪をいわつて、石川の家に来ていたときますわい、澄三のおやじの話は、そこできいていたゞくとしてなあ……。およしぼうも、くるついでに、船主によつてあそこのおやじさんや、高木の父つあんご一しよに生き返つて、帰つてきた人たちを、石川へひつぱ

つてきてもらおう。さつきいつといたで、あそこにいるからな。母やんには、すぐ夕めしをとゞけさせるで、さびしゆうても、るす番してもらうじや、さあ、高木のじいさ、一しよに出かけようや。としよりは、としよりどうしでな、はゝゝゝ』

第七章 夢の絹糸草

『海が波だつてくると、一めんが白いあわになる、漁船なんか、しやぼんの水につゝまれた、小さいはつばで、人間は、これにつかまつているありみたようなもんでさ』

これが、その夜、生きかえつてきた澄三の父が、はなし出した言葉でした。

『それなのに、わしら海にはたらく者は、どうしても、それをやめる氣にならないですからね、海に魅いられてると、言つてもいゝでしょうよ。こんどで、わしが、海のあわばかりになるのを見たのが三ど目でしてね』

(その漁船は、ごく小さいので、のり手も八人きりだつたのです。少しとおく出かけて沖のたら場を

めざしたのですが、ちよつとしたついで一日のぼしたため、ひどい大荒れにあつてしまいました。それも、かじをおつたのが、なんぎのはじめで、風がないときは、船も一本しかのこつていませんでした。

『こまつたことに、すぐ食べものがなくなるし、水もおしまいになつたことです。どこだかわからない海の上で、ぎらぎら照されると、みんなきちがいになりそうなのです。』

(海の水をけつしてのむな)

と朝のうちは、船べりにしめつた水をなめていましたが、いつか船のそこにみんなごろごろがつて、うめきはじめました。それが三日ほどつゞいたのです。

その夕がた、大雨があつて、おまけに船ぞこのいけすで、小えびを一びきみつけました。これが命の親になつたのです。それは、これをえさに、綱をほぐしたはりがねのつりばりで、小ざめを一びき釣つたからで、そのはらのなかくら、またえさをみつめ、これでどうやらしのいだのでした。

でも、やつと秋田の漁船にたすけられるまでに、船の道具まで燃してしまい、これはひかれてくるうちに水船になつて、とうとうすてねばなりませんでした。わたしたちは、このことだけさんねんに思いますが、のこした病氣の三人も、少しあちらで養生していればすぐ帰れると思います。ほんとにありがたいことです。まつたく幸運というものです。

とうして命をひろつてみれば、みんなまた、海で、もいちど働こうと、やくそくしあつたのです』

生きて帰つてくれば、もうすぐ

『また海へ出る』

という父が、澄三には、うれしかつたのです。

ふとつた船主さんもいきました。

『こうして、乗組みがみんな、生きて帰つてくれば、船なんかおしいどころか、みんなにかわつてくれたと、ありがてえわけだわな。およしにきけば、永井検事さんのおかげで、おじいも澄三も、火つけの罪がはれたとかで、おめでてえ上に、またおめでてえわけだ。』

澄三もあしたから、また学校がよいだらうから、うちのとなかよくしてやつてくれる。およしも、(あしたから、おかみさんがや、やをうむまで、はたらきにきます)

といつてくれたであらう。あともよろしくたのまあ』

『は』

およしが、父にかわつて、元氣よく返事をしたので、みんなどつと笑いました。

澄三は、台のそばにすわつて、邦雄とその姉とならんでいましたが、おとなのお酒のなかまにはなれないので、邦雄がいました。